

目 次

はじめに	1
第 1 章 韓国伝道開始と讃美歌普及のはじめ	6
第 2 章 韓国における讃美歌の普及と近代歌謡の形成	18
第 3 章 韓国の初期讃美歌集の相互の影響関係と出典とについて	26
第 4 章 韓国における讃美歌の普及と医療伝道	46
第 5 章 韓国における讃美歌の特殊な機能	51
第 6 章 韓国における讃美歌の歌い方の特徴	53
第 7 章 オルガンと讃美歌の普及	54
第 8 章 讃美歌に関する分業	56
第 9 章 韓国人の讃美歌受容に関する宣教師の評価	63
第 10 章 韓国での讃美歌集の出版活動	65
第 11 章 残された課題	76

研究組織

研究代表者 安田 寛（奈良教育大学教育学部教授）

交付決定額（配分額）

（金額単位：千円）

	直接経費	間接経費	合計
平成13年度	1,100	0	1,100
平成14年度	2,200	0	2,200
総計	3,300	0	3,300

研究発表

学会発表

安田 寛「19世紀後半から20世紀前半における韓国での讃美歌編纂および出版活動について」
（第64回日本比較文学会全国大会、2002年6月16日 於京都造形芸術大学）

はじめに

1. 研究の目的

1850年頃から1910年頃に至る東アジア歌謡近代化の最初の過程を、讃美歌がこの過程で重要な役割を演じた、との独自の視点から明らかにすることが、本研究の最終目標である。。

この時期、中国、日本、韓国の歌謡の近代化を押し進めたものは、キリスト教宣教運動にともなって普及した讃美歌であった。19世紀の後半、讃美歌から強い影響を受けて日本で唱歌が生まれると、それは、日清戦争以降、すでに讃美歌が普及するか定着しつつあった韓国、中国に受容され、これらの地域の歌謡の近代化を促進した。

中国、日本、韓国とを比較しつつ、これまでほとんど研究されていない以上のような文化変容の過程を、宣教師文書によって明らかにする。

当面の目標は、日中韓の近代歌謡形成の基礎になったと考えられる讃美歌あるいはその教育についての実態が明らかにし、東アジアの近代歌謡形成の初期の重要な部分が解明することである。

ただし、今回は主として1885年から1910年までの時期の韓国について明らかにし、中国に関することと、日中韓の比較は今後の課題として残された。

2. 研究の方法

宣教師文書は現地の宣教師と宣教本部との往復書簡、定期的報告書、現地議事録、本部議事録などから成る文書群であるが、日本と韓国の両国で宣教活動を展開したメソジスト監督教会と長老派について、韓国に関する宣教師文書をマイクロフィルムで収集する。

今回使用する主な資料は次のものである。

- ・ Missionary Files: Methodist Episcopal Church: Korea Missionary Correspondence, 1884-1915.
- ・ Presbyterian church in the U. S. A.: Board of foreign Missions. Korea Mission, 1884-1911.
- ・ Presbyterian church in the U. S. A.: Board of foreign Missions. Korea Mission Records, 1903-1957.
- ・ Woman's Work for Woman. 1871-1885.
- ・ Woman's Work: A Foreign Mission's Magazine. 1885-1924.
- ・ Women and Missions. 1924-1946.

収集した宣教師文書について、宣教師文書の中で讃美歌とその教育に関する最も重要なキーワードであるオルガン、讃美歌、歌唱に関して索引を作成する。

作成した索引を手がかりに、下記の分析視点に基づき、讃美歌とその普及の様子、讃美歌教

育の実態、讃美歌の受容過程、讃美歌集編纂の具体的様子を解明する。

(1) オルガンに関しては、それを本部に請求する宣教師書簡とそれにたいする本部からの返事に報告されることの多い、現地での讃美歌教育に関する様子を明らかにし、さらに、限られた予算をどれだけオルガンをはじめ、讃美歌教育に配分したかを見て行く。

(2) 讃美歌集編纂および出版に関しては、現地宣教団体の年会記録、活動議事録、本部の理事会の議事録に集中して現れる。それらの文書によって、出版費用、発行部数、編者、讃美歌の翻訳者について明らかにする。

(3) 歌唱に関しては、どういう階層の人々が歌ったか、それはどの程度であったか、宣教師の評価と歌った現地人の反応と自己評価を明らかにしてゆく。

讃美歌教育の背景を知るには、人物、施設、制度、地名等に関する文書も重要になってくる。

(1) 人物に関しては特に、讃美歌教育の熱心に関わった宣教師を特定し、個人書簡を中心に彼に関する宣教記録を集中的に解説する。

(2) 施設に関しては、讃美歌教育に熱心であった教会、ミッションスクールに注目する。

(3) 制度に関しては、布教活動の中で音楽教育がどのように位置づけられていたかに注目する。本来の布教活動を逸脱しない範囲での讃美歌教育という制限に女性宣教師が苦慮したであろう様子を伝える書簡、報告書を見つけた。

(4) 地名に関しては、布教線の伸長と讃美歌教育の普及の関係に注目する。

3. 先行研究について

この研究は東アジアの近代歌謡の形成過程を明らかにする研究の一部を成すものである。19世紀に中国、台湾、日本、韓国の歌謡の近代化つまり西洋化を最初に押し進めたものは、キリスト教宣教師が普及させたイギリスとアメリカの大衆宗教歌である讃美歌であった。19世紀の後半、讃美歌から強い影響を受けて唱歌が日本で生まれると、それは、日清戦争以降、日本の植民地支配によって、台湾、韓国、満州に普及し、また、日本に近代化の手本を求めた中国人留学生によって中国にも普及した。これらの国では日本の唱歌によって歌の近代化・西洋化がはじまり、そこから現代の流行歌も生まれた。

研究の位置づけについては、歌謡について、こうした文化変容の過程を明らかにしようとする研究は、内容から見ても、方法から見ても、音楽史研究であるが、西洋音楽史、東洋音楽史といった従来の音楽史研究は、この問題をほとんど扱ってこなかった。日本では唱歌の研究はこれまで、「音楽教育史」あるいは「洋楽受容史」として行われてきたが、讃美歌との関係が無視され、また視野が日本だけに限られていた。西洋の影響から生まれた東アジアの近代歌謡は民族音楽学の研究対象にもならなかった。

これまでの研究経過について述べると、日本の唱歌が東アジアの国々に与えた影響、つまり日本の唱歌がそれらの国の歌謡の近代化に果たした役割についての研究は、まず上海音楽院教

授羅傳開（1990年）によってはじまり、同じ研究が北京音楽院教授張前（1994年）によっても行われ、唱歌については欧米との関係のみを問題にしていた日本の研究状況が批判された。台湾の唱歌については、劉麟玉（1995年）によって研究がはじまった。韓国の唱歌の研究は、山本華子（1993年）、関庚燦（1994年）、朴成泰（1994年）によってはじまり、韓国では、讃美歌から社会運動の歌である愛国歌が生まれ、それが唱歌と呼ばれたが、1910年に日本の植民地となってからは、韓国の唱歌は日本の唱歌の影響圏に吸収されたことなどが解明された。

この研究の独自の視点は、東アジアの近代歌謡文化形成過程を明らかにしようとする場合、キリスト教宣教師によって普及させられた讃美歌の研究が不可欠であるとするものである。韓国と同様、日本でも唱歌は讃美歌の影響から生まれたからである。文部省の最初の音楽教科書「小学唱歌集初編」（1882年）が讃美歌を基礎にしていることは筆者（1993年）が明らかにしたとおりである。

20世紀に日本の唱歌が東アジアに伝播し、その歌謡の近代化に大きな影響を与えることが出来たのは、一つには、それらの地域でキリスト教宣教師らの布教活動によって、すでに讃美歌が普及していたからで、他の一つは、日本の唱歌が讃美歌の一変種であったことが大きいと考えられる。

以上述べた視点から讃美歌を研究することは、日本では、アメリカの有力な伝道団体の一つであったアメリカン・ボードに関して、筆者は同志社大学人文科学研究所での一連の研究（1995年以降）で初期讃美歌教育の実態を明らかにしてきた。中国や台湾では、まだ、研究がはじまっておらず、韓国では関元徳（1966年）の研究があるのみであった。今日でも一次資料による信頼できる研究としてはムン・オッペ（2000年）の研究しかない。

海外伝道に関する文書をまとめて閲覧することが一部の例外を除いて困難であったことが、これまで研究を難しくしていたのである。

4. 主要先行研究一覧

羅傳開（1990年）「2重の文化接触」『月刊かるず』第121号、123号

劉麟玉（1995年）「日本植民地下の唱歌教育－台湾における西洋音楽受容の一側面」（富士ゼックス小林節太郎記念基金）

山本華子（1993年）「朝鮮植民地下学校唱歌研究－初等教育用唱歌集およびその所収唱歌の分析を中心に－」（東京芸術大学修士論文）

関庚燦（1994年）「韓国唱歌形成過程における日本唱歌の影響について」『異文化交流と近代化－京都国際セミナー1996－』（1998年）大空社

張前（1994年）「異文化交流と中国音楽の近代化－学堂唱歌を中心に」『異文化交流と近代化－京都国際セミナー1996－』（1998年）大空社

朴成泰（1994年）「韓国近代化教育史における『愛国唱歌教育運動』の意義－日本の対韓音楽教育政策を背景として－」『音楽教育学』第24巻第2号。

関元徳（1966年）『開化期の音楽教育』

筆者の関する一連の研究

「唱歌と十字架」（1993年）音楽之友社

「日韓唱歌の源流」（1999年）音楽之友社

「キリスト教宣教師が日本の唱歌成立に果たした役割・その歴史的検証」『洋楽史再考』
（1993年）国立音楽大学

「キリスト教宣教師と唱歌成立のダイナミズム」『異文化交流と近代化—京都国際セミナー1996—』
（1998年）大空社

「日本ミッション伝道方針と讃美歌に関する活動」『来日アメリカ宣教師—アメリカン・ボード
宣教師書簡の研究 1869～1890—』（1999年）現代史料出版

「洋楽移入期における唱歌と讃美歌との関係」1992年、山口芸術短期大学紀要第24巻

「唱歌導入の起源について」（1993年）山口芸術短期大学紀要第25巻

「唱歌導入に関する資料紹介」（1994年）山口芸術短期大学紀要第26巻

「瀧廉太郎の伝記的研究その1 入信とその背景」（1995年）山口芸術短期大学紀要第27巻

「L.W.メーソンの再来日計画とアメリカン・ボード日本ミッション」（1995年）キリスト
教社会問題研究第44号（同志社大学人文科学研究所）

「晩年のトゥルジェーと日本の洋楽」（1996年）山口芸術短期大学紀要第28巻

「唱歌の起源—目賀田種太郎関係資料と唱歌掛図復元—」（1997年）山口芸術短期大学紀要第29
巻

「アメリカン・ボード日本ミッション音楽教育史」（1998年）キリスト教社会問題研究第46号
（同志社大学人文科学研究所）

北原かな子「弘前における洋楽受容のはじまり」（1998年）弘前大学教育学部紀要第79号

「日本における西洋音楽の受容過程（1998年）音楽理論研究第3集（ソウル大学音楽部西洋音
楽研究所）」

Min Kyung Chan, "The Introduction and Development of Modern Triple Meter songs into Japan and
Korea," (1998). Searching for a New Paradigm of Music Education Research: An
International Perspective, Korean Music Educational society.

北原かな子「弘前と遺愛女学校の音楽教育」（1998年）弘前大学教育学部紀要第80号

「京都と神戸ステーションの音楽教育史—アメリカン・ボード日本ミッション音楽教育史その
二」（1998年）キリスト教社会問題研究第47号（同志社大学人文科学研究所）

北原かな子「楠美恩三郎と弘前」（1999年）弘前大学教育学部紀要第81号

北原かな子「弘前女学校の音楽教育（1999年）弘前大学教育学部紀要第82号

「大阪ステーションの音楽教育史—アメリカン・ボード日本ミッション音楽教育史その三」
（1999年）キリスト教社会問題研究第48号（同志社大学人文科学研究所）

北原かな子「明治期の津軽地方における讃美歌の受容—明治初期から三十年代前半まで—」
（2000年）弘前大学教育学部紀要第83号

「イーベン・トゥルジェーの伝記的研究」(2000年)弘前大学教育学部紀要第84号

北原かな子「明治四十年前後津軽地方における洋楽受容に関する考察」(2001年)弘前大学教育学部紀要第85号

「キリスト教史学会学術奨励賞受賞『讃美歌・聖歌と日本の近代』を読むー唱歌とキリスト教宣教との関係についての研究史の紹介のためにー」(2001年)弘前大学教育学部紀要第85号

"The necessity of comparative study of the history of music education in pacific basin countries.," (2001) The 3rd Asia-Pacific Symposium on Music Education Research, pp.185 - 186. Aichi University of Education.

「トゥルジェーの音楽思想と日本の音楽教育」(2001年)弘前大学教育学部紀要「クロスロード」

第3号

「神戸女学院の音楽教育史ーアメリカン・ボード日本ミッション音楽教育史その四」(2002年)キリスト教社会問題研究第51号

5. 主要参考文献

関庚燦(1991年)韓国讃美歌全集全12巻

ムン・オッベ(2000年)「韓国近代教会音楽受容研究」(修士論文、韓国芸術総合大学校音楽学部)

第1章 韓国伝道開始と讃美歌普及のはじめ

1. 宣教の開始と讃美歌

伝道が開始された1885年には、ソウルにアッペンゼラー (Rev. H. G. Appenzeller)、スクラントン (William B. Scrantn, M. D.) そして婦人海外宣教会から派遣されたスクラントンの母 (Mrs. Mary. F. Scranton) の3人が駐在した。アッペンゼラーとスクラントンの妻 (Mrs. Ella J. Appenzeller, Mrs. L. W. A. Scranton) は補宣教師として夫の活動を助けた。

メソジスト韓国伝道が開始されて2年ほどが経った1887年6月発行の宣教雑誌 (Gospel in All Lands) によると、新しい官立学校 (Government School) では宗教は教えられていなかった。また、孤児に讃美歌を教えることは許されていないので、非宗教的歌を導入しなければならない、といった状況であった。

孤児に関しては、1886年1月20日付けの書簡で長老派のアンダーウッドは、ソウルには孤児がとて多く、10人ほどの孤児院はうまくいっている、と述べている。

この頃はこのような孤児院で讃美歌を教えることはまだ禁止されていたのである。

長老派のアンダーウッド夫人の1889年9月3日の書簡によれば、自宅にやって来てオルガンに驚いた婦人たちに「明るくて、気を引く (bright, striking) 讃美歌を数曲歌うと彼女らはとても喜ぶ」というのであったから、讃美歌教育はまず歌って聴かせ、興味を引くことから始まったと考えられる。

讃美歌に関する重要な記述が最初に登場するのは、1891年9月発行の宣教雑誌 (Gospel in All Lands) である。

「前の日曜日の午後、2人の婦人が市の城壁の上を歩いていた。彼女らの後をたくさんの子どもがついて歩いた。子どもは "There is a Happy Land" を自分たちの言葉で歌っていた。どこで覚えたのか婦人たちは知らなかった。子どもたちは改宗者ではなさそうだったが、讃美歌を暗い家の中まで運んでいる。同じように私も驚いたことがある。同じ歌の一節が歌われるのを聴いた。辺りを見回すと、2人の4歳の少女がその一節を歌っていた。クリスチャン学校にいる彼女らの2人の姉たちを訪ねたときに聞き覚えたようだ」

この頃、ソウルにはミッションが経営する女子小学校が2つあり、出席者はおよそ40人であった。またミッションの病院では日曜日には定期的に礼拝が行われ200人以上が参加したという。

同じ年の1月5日のアッペンゼラー書簡によると、日曜礼拝が行われていたのは、午前9時から病院、西の市外、東門、午後2時半からは大学ホールで行われた日曜学校、そして夕方には丘の上にある婦人の家 "Ladies' Home" の各所であった。

街の子どもたちが自然に讃美歌を口ずさむようになっていたこの頃には、小学校でも、病院の日曜礼拝でも讃美歌が歌われるようになっていたと考えられる。

これより少し後の婦人の家 "Ladies' Home" の讃美歌について、スクラントン夫人は、「時には婦人たちがよく知っている言葉で歌える歌が、たった一つの短いものしかないことがある」

と述べている。

これによればハングルで最初の讃美歌が歌われ始めたのは1892年頃のことであった。

2. 韓国人が最初に歌った讃美歌とその楽譜

後の韓国の近代大衆歌への筋道を考えるためにも、ここで、宣教師の書簡等で確認できる、韓国人が最初に歌った讃美歌を確認しておくのがよいであろう。

韓国人が最初に歌った讃美歌が "There is a happy land" であったことについては多くの記述が見られる。

「前の日曜日の午後、2人の婦人が市の城壁の上を歩いていた。彼女らの後をたくさんの子どもがついて歩いた。子どもは "There is a Happy Land" を自分たちの言葉で歌っていた」

(Gospel in All Lands, September 1891)

「晴れた日には2時半までに50人から60人が床に詰めて座ると、ギフォード夫人が小さなオルガンを弾き、ミス・ドティの学校は自分たちの言葉で "Jesus loves me, this I know," "Nothing but the blood of Jesus," "Happy Land" を歌います」 (「婦人の仕事」1891年第6巻)

「レヴィスは子どもたちに歌を教えています。彼らは二人とも「幸せの国 "There is a happy land"」の言葉を知ってます」 (1892年12月14日付けシャーウッド・ホール夫人書簡)

「Kro no Mokol の家の first porch で小さな日曜学校を開いた。

新しく来た子供と比べると、前からの子供が確かに進歩しているのが分かる。

彼らは教理問答の質問にはっきりと答え、Jesus loves me, Happy Land, What can I wash away my Sin を歌うことが出来る。・・・彼らの楽しみはもはや歌しかない。今や彼らはとても上手に歌う」 (Miss Ellen Strong の日曜学校報告、1893年)

「私たちは彼女たちを喜ばすために "There is a Happy Land" と "Nothing but the Blood of Jesus" を歌う。彼女たちは夢中になってわたしたちの歌を聴く」 (「婦人の仕事」1894年第9巻)

次に、"Jesus loves me" も韓国人が歌った最初の讃美歌の一つであったことが以下の記述から分かる。

「世俗的改変があることが知られている。私が韓国に戻ったとき、韓国人が次のように歌っているのを知った。

"Jesus loves me this I know, Oh Bible please say so (正しい歌詞: for the Bible tells me so—筆写注)

Little ones to him belong, Jesus will buy the blood(同上: but he is strong)"

私はこれらとそして同様な誤りを訂正した」 (1893年11月2日付けアンダーウッド書

簡)

「Kro no Mokol の家の first porch で小さな日曜学校を開いた。

新しく来た子供と比べると、前からの子供が確かに進歩しているのが分かる。

彼らは教理問答の質問にはっきりと答え、Jesus loves me, Happy Land, What can I wash away my Sin を歌うことが出来る。・・・彼らの楽しみはもはや歌しかない。今や彼らはとても上手に歌う」 (Miss Ellen Strong の日曜学校報告、1893年)

「私はここで日曜学校をはじめた。たいていの子どもたちが私をしっているのです。彼らのために自分の日曜日を諦めた。彼らはやってきて歌うことが好きだから。彼らは私が何をしているか見たがり、何人かは一日に何度もやって来た。今日、そのうちの2人が自分たちだけで "Jesus loves me" を歌った」 (「婦人の仕事」1894年第9巻)

「牧師が讃美歌を宣言する。"Jesus loves me" または "I am so glad that our Father in Heaven"。私は子どもたちを見る。そして喜びの視線をとらえる。というのはこれらの讃美歌がわれわれの日曜学校讃美歌の2つであるからである」 (「婦人の仕事」1900年第15巻)

「一人の少年は "Jesus loves me" の最後の3つの音符しか知らない。それでわれわれは加勢しなければならない」 (同上)

その他、讃美歌名が出てくる記述には次のものがある。

「晴れた日には2時半までに50人から60人が床に詰めて座ると、ギフォード夫人が小さなオルガンを弾き、ミス・ドティの学校は自分たちの言葉で "Jesus loves me, this I know," "Nothing but the blood of Jesus," "Happy Land" を歌います」 (「婦人の仕事」1891年第6巻)。

「Kro no Mokol の家の first porch で小さな日曜学校を開いた。

新しく来た子供と比べると、前からの子供が確かに進歩しているのが分かる。

彼らは教理問答の質問にはっきりと答え、Jesus loves me, Happy Land, What can I wash away my Sin を歌うことが出来る。・・・彼らの楽しみはもはや歌しかない。今や彼らはとても上手に歌う」 (Miss Ellen Strong の日曜学校報告、1893年)

「小さな書斎は一杯になった。祈りがはじまり、彼らが立ち上がり、"My faith looks up to Thee, Thou Lamb of Calvary" と讃美歌を大きな文字で書いた自作の油紙のチャート(oiled-paper chart)に向かって立ったとき、これらの茶色の顔に浮かんだ、善良で、真面目な表情に驚かされるであろう」 (「婦人の仕事」1894年第9巻)

「私たちは彼女たちを喜ばすために "There is a Happy Land" と "Nothing but the Blood of Jesus" を歌う。彼女たちは夢中になってわたしたちの歌を聴く」 (「婦人の仕事」1894年第9巻)。

「彼女(聖書クラスに出席した20人から30人の婦人)らは歌うことをとても楽しんでお

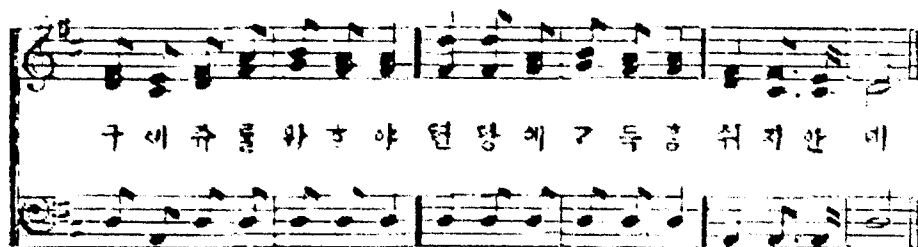
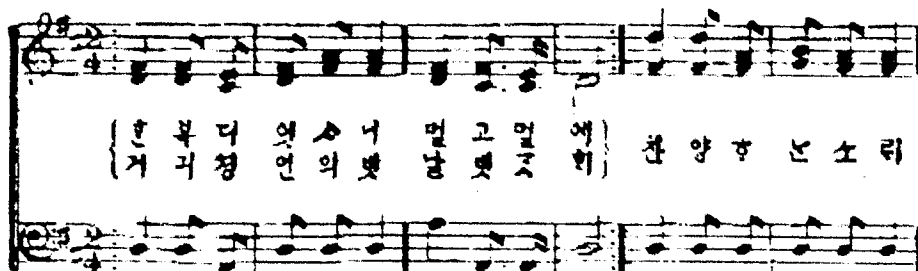
り、いくつかの讃美歌にはとても強い好みを示している。"Jesus, I My Cross Have Taken," "Happy Day", "Nothing but the Blood of Jesus."」（「婦人の仕事」1897年第12巻）。

「ミSSIONの数人の婦人たも見送りのためここにやってきて、女生徒たちもやって来て一行を見送りながら "God be with you" を歌った」（「婦人の仕事」1899年第14巻）。

「牧師が讃美歌を宣言する。"Jesus loves me" または "I am so glad that our Father in Heaven"」（「婦人の仕事」1900年第15巻）

109. HINDOSTAN. 6s. 4s. 7s.

There is a happy Land.



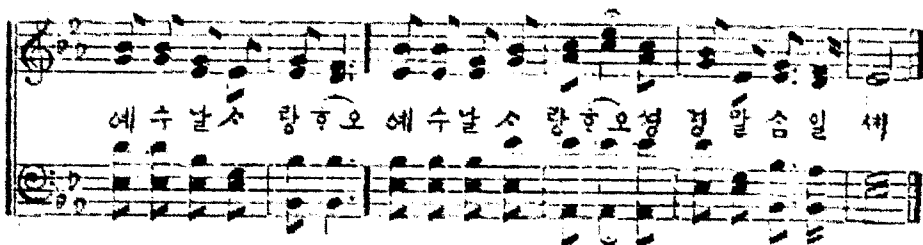
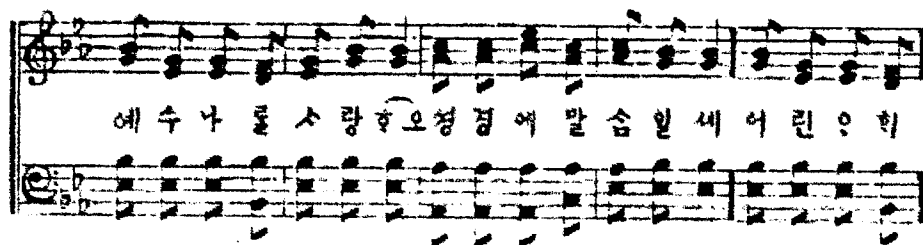
		四		三		二		一		○ 第 百 九
면류권을 잊으니	주은글 벗 스와	무궁락은	부디에와서 석	적정이 업소리라	현복이 주하너	이부디로오라	이부디로오라	최를 못 밟고	소옥에 버섯 나	거기 사논 사람
										찬양하논 소리
										구세주를 위하야
										멀고 멀에
										한 부 디 의 소 니
										有 福 之 地
면류권을 잊으니	날 노 잊는 벗 처	사랑하네	우리 청부 호상	향복하러	길게 유와즈치	웨속으라	웨속으라	현소와즈하너	모른시고	즐겁고 편하야
										고가 업네
										취지안네
										천당에 7 독 흥
										날 벗고 하
										거기 청 연 의 벗

百十七

図2 「讚揚歌（1894年）に掲載された Happy land

21. JESUS LOVES ME. 78.

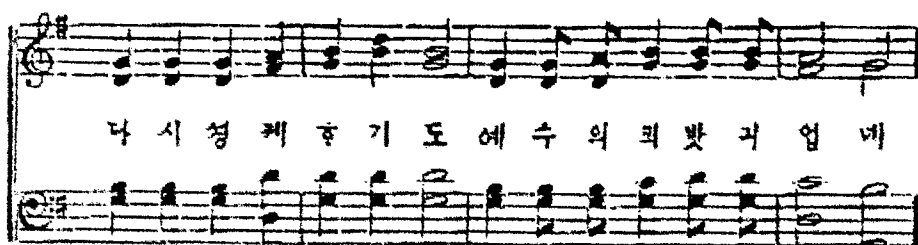
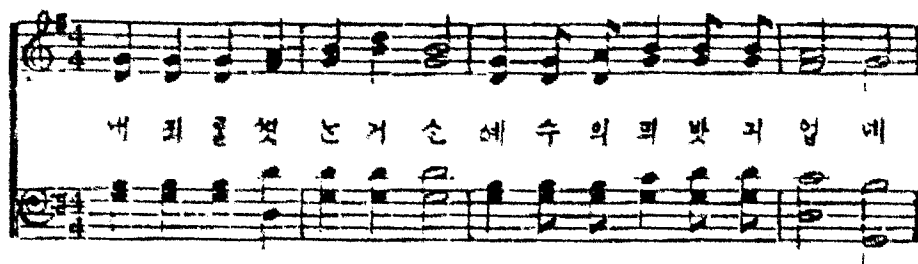
Jesus loves me this I know.



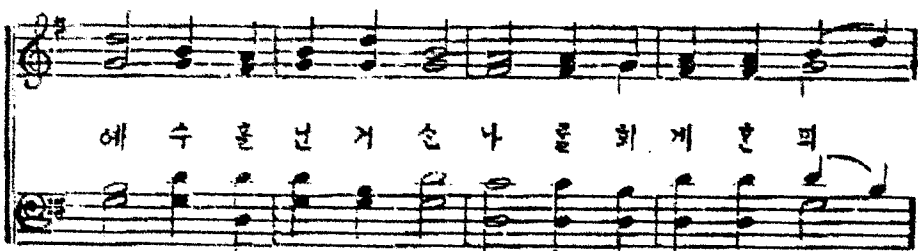
六 이 에 수 를 사 랑 하 니 면 이 부 락 못 으 리	五 영 원 하 오 드 러 오 면 영 원 하 오 드 러 오 면	四 아 모 근 심 히 마 라 아 모 근 심 히 마 라	三 지 금 은 자 를 사 랑 하 오 지 금 은 자 를 사 랑 하 오	二 하 느 니 크 게 여 오 하 느 니 크 게 여 오	一 정 령 에 맡 김 일 세 정 령 에 맡 김 일 세	○ 第二十一 耶 穌 愛 我
에 수 를 사 랑 하 니 면 에 수 를 사 랑 하 니 면	에 수 를 사 랑 하 오 드 러 오 면 에 수 를 사 랑 하 오 드 러 오 면	아 모 근 심 히 마 라 아 모 근 심 히 마 라	지 금 은 자 를 사 랑 하 오 지 금 은 자 를 사 랑 하 오	하 느 니 크 게 여 오 하 느 니 크 게 여 오	정 령 에 맡 김 일 세 정 령 에 맡 김 일 세	一 리 은 히 임 작 요 에 수 가 피 로 샀 네

圖3 「讚揚歌（1894年）に掲載された Jesus loves me

64. NOTHING BUT THE BLOOD. 7s. 8s. *It's his own blood wash away my sin.*



REFRAIN.



六十

図4 「讃揚歌（1894年）に掲載された Nothing but the blood of Jusus

20. JESUS LOVES EVEN ME. 10a. I am so glad that our Father in Heaven.

하느님의 아바지 주신 선물은 이 사랑으로 온단 말

CHORUS.

슬관코나 예수날 사랑하소서

즐겁고 또 놀시고 춤으로 또 코나

十九

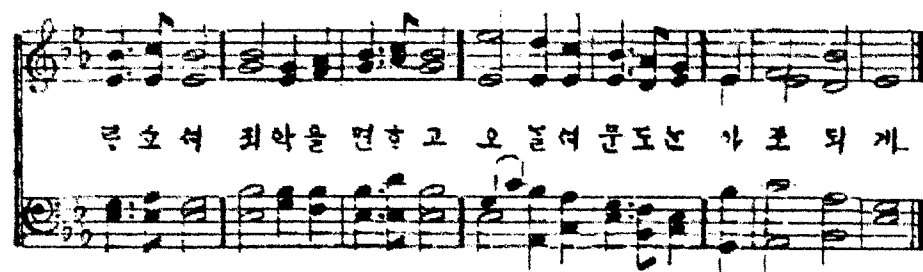
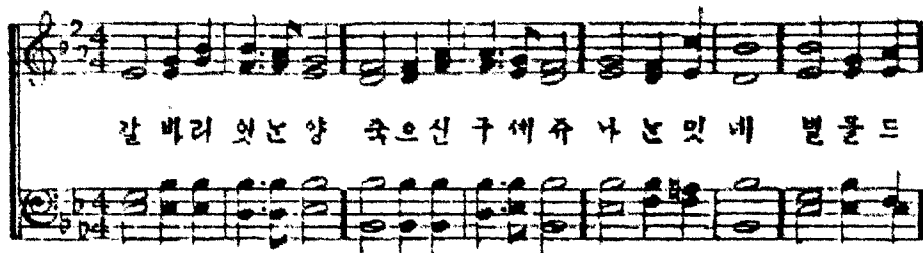
五	四	三	二	一
예	예	나	예	영
마수우	수	심	나	영
귀날리	가	스	나	영
가소논	이	가	예	영
늘랑엇	더	우	수	영
나흔더	게	희	만	영
급다제	소	강	치	영
치고보	랑	죽	스	영
가호답	후	으	랑	영
깃면호	너	셋	하	영
네	고	네	네	영

○ 第二十 救主愛我

図5 「讃揚歌（1894年）」に掲載された Jesus loves even me

33. OLIVET. 6s. 4s.

My faith looks up to Thee.



	四		三		二		一	
검은	죽이	그변	고성	홍날	연전	죄벌	죽갈	○
울배	음세	문하	로전	상노	약능	악물	으바	三
업로	을상	길야	로뵈	성훈	호은	을드	신리	十
시상	당석	안불	엇힘	각년	망해	면문	구외	三
후주	당홀	가히	시훈	하리	용로	호호	세논	
고사	배고	게게	너길	고로	을쳐	고석	주양	

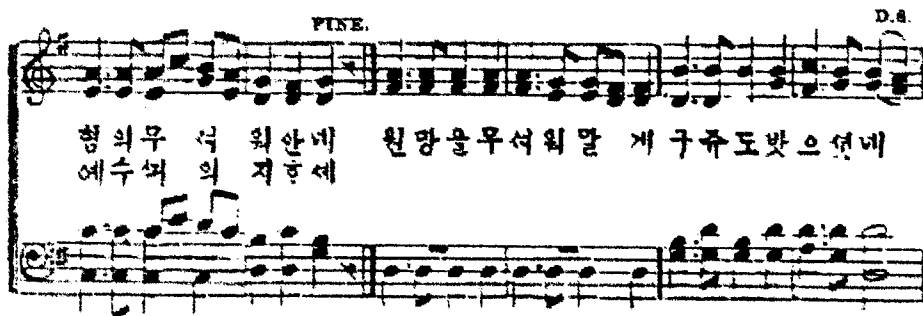
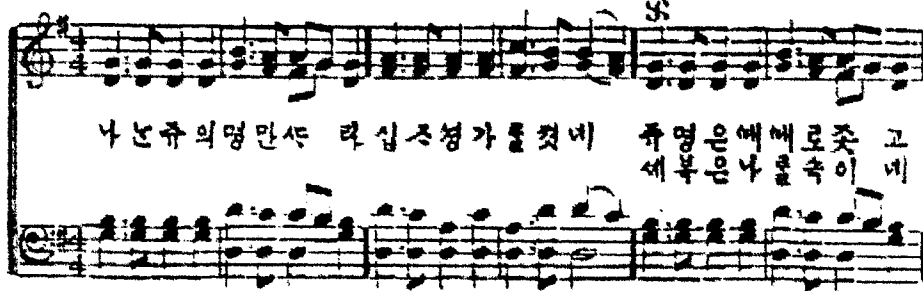
백련	실론	석나	눈물	어두	불꽃	막을	곳가	아오	나온	仰
청당	흔흔	잔제	노노	두은	갓갓	변변	하하	조조	온온	望
상으	름름	회회	햇햇	것것	치치	말말	게게	되되	도도	主
로로		호호	석석			아아		문문	논논	
가가		석석						도도	논논	
석석								논논		

三十四

図6 「讃揚歌（1894年）に掲載された My faith looks up to Thee

89. ELLESDIE. 8a. 7s.

Jesus, I my cross have taken.



		二		一		○ 第八十九	恒心從主
저앙글무석말게	주가나온사랑하나	모도님릴지라도	저문과던답과집을	구주도뵈셨네	원망을무석워말게		
날깃보게모스후네	유가업스편부러가	저앙이복이되네	유물위하야뵈스면	예수석의지후세	세복은나를축이네	형의무석워안네	유명은해해로쫓고

九十四

図7 「讃揚歌（1894年）に掲載された Jesus, I my cross have taken

삼
주는 백성복인이니
이전조비세로하고
우리몸에여수차면
위로하리고함초서
조비함신자리하래
기도권세시힘함내
눈감을것즉시보려
현상영화보라보매

N. 62. O Happy day, that fixed my choice

Edward Howard. 150.

데 특집 초고를 하는 일
일
좀 기분 좋게 하느니라
나를 그 식삼는 날
월노크게 기분소리
현하만 민압회하네
후렴
기분날 기분날
예수내외다 셋신날
빌고 혼방비하느니라
예수불하느니라
기분날 기분날
예수내외다 셋신날

SONGS OF THE CHRISTIAN LIFE.
HAPPY DAY, L. M.

1. { O hap-py day, that fixed my choice On thee, my Saviour an' my God! Happy day, happy day,
We'll may this glowing heart re-joice, And tell his cap-tures all a-broad! H.S. - Happy day, happy day.

150

O happy day

2 O happy band, that seals my vows
To him who merits all my love!

Let cheerful anthems fill his house,
While to that sacred shrine I move.

B 'Tis done, the great transaction's done;
I am my Lord's, and he is mine;

He drew me, and I followed on,
Charmed to confess the voice divine.

4 Now rest, my long-divided heart ;
Fixed on this blissful center, rest ;
Nor ever from thy Lord depart.

With him of every good possessed.
Philip Doddridge.

図8 「讃美歌（1895年）」に掲載された O Happy day と Epworth Hymnal にある元の讃美歌

第2章 韓国における讃美歌の普及と近代歌謡の形成

当時アメリカは大衆的通俗的讃美歌集の大量出版時代を迎えており、韓国の初期讃美歌はこういった後の大衆歌謡の萌芽といえるアメリカの通俗讃美歌の影響を強く受けている。これは讃美歌の普及が韓国における近代歌謡形成に基礎を提供したという仮説にとっては重要な事実である。

1891年2月の年会で長老派のアンダーウッドが著作活動について報告した中で、韓国讃美歌の出典について触れ、次のように語った。

「この一年間、他の仕事の合間をみつめて、事情が許す限り新しい讃美歌を翻訳した。以前翻訳されたものについてもすべて注意深く修正した。多くの時間と努力を費やしておよそ30の讃美歌を用意した。その大部分は人気のある家庭用宗教歌 (more popular home sacred songs) から翻訳した。残りは韓国人の作詞である。」

特に注目されるのは、およそ30の讃美歌の「大部分は人気のある家庭用宗教歌 (more popular home sacred songs) から翻訳した」

という箇所である。つまり、当時アメリカの日曜学校とか家庭で歌われていた、現在の、簡単に言うとポピュラーソングに近いような歌から翻訳したというようにアンダーウッドは言っている。

ところで、アメリカの「人気のある家庭用宗教歌」とは具体的にどのようなものを指すのであろうか。これについては、1892年になるとメソジスト派のミッション・スクール培材学堂で毎日集会があり、Epiworth-Hymnalにある讃美歌を歌っている、と具体的に記述されていることが注目される。

この年の活動総括で教育活動に関して、アッペンゼラーは、
「培材大学は昨年秋に学生2人で大学部門をはじめた。彼らは1年間勉強を続けた。昨年ほどたくさんではなかったが、予備部門もまじめに仕事をした。年間を通しての学生の人数は両部門を併せて61名であった。・・・われわれは聖書を読み、Epworth-Hymnalにある讃美歌を歌い、毎日祈っている。すべての学生は日曜礼拝に出席するように義務づけられている」と述べている。

さらに、メソジスト派が1895年に出版した2番目の讃美歌集である「Chan Mi Ka」の序文に、

「曲に関しては、出来るだけMethodist Hymnalを参照した。ヘッドラインのM. M. はMethodist Hymnalを、G. H. はGospel Hymns consolidatedを意味している。別の本から曲を選んだ場合は、本のフルネームを書いておいた」

と書かれていることである。

「Gospel Hymns consolidated」とは、ニューヨークの「Biglow & Main」から1883年に出版されたもので、「Gospel Hymns」の第1号から第4号までを合本したものであった。

当時シカゴを中心に、大衆に人気のある讃美歌を有効に使った大衆伝道で大きな成果をあげ注目されていたドゥワイト・ムーディに協力した歌手のアイラ・サンキーとブリッス (P. P.

Bliss) が編纂した讃美歌集「Gospel Hymns and Sacred Songs」は1875年に出版された。第2号は1876年に出版された。サンキーの他、James McGranahan と Geo. C. Stebbins が編纂した第3号は1878年、第4号は1881年に出版された。

また、「別の本から曲を選んだ場合は、本のフルネームを書いておいた」としてフルネームで挙げられている讃美歌集は、「Chan Yang Ka」「Franklin Square Coll.」「Epworth Hymnal」の3集である。

「Chan Yang Ka」については同じ序文で、

「1892年以来、韓国教会の讃美歌学を（一字不明）するための努力によって、進歩のための偉大な一歩がしるされた。仕事のこの方面で最も功績のあったアンダーウッド牧師は1894年にChan Yang Ka を出版した。つい最近プレスビテリアンの兄弟は編集員会によって讃美歌集を出版した。われわれはChan Yang Ka に謝意を表したいと思う」と述べてある。

「Franklin Square Coll.」つまり「フランクリン・スクエア・ソング・コレクション」は、当時全6巻まで出版された歌曲集で、当時の人気のある大衆宗教歌が多く掲載されていた。

最後の「Epworth Hymnal」は最も注目される讃美歌集である。

まず、これはすでに述べたように培材学堂の生徒が毎日の礼拝で使用していた讃美歌集であった。この讃美歌集はそのフルタイトル「The Epworth Hymnal containing satandard hymns of the church, songs for the Sundry-School, songs for social services, songs for the home circle, songs for special occasions.」からも分かるように、主として日曜学校で使うために編集された讃美歌集で、1885年にニューヨークとシンシナティで出版された。1885年といえば、メソジストによる韓国伝道が開始された年である。

この讃美歌集の選曲の基準は、序文に寄れば、「集会の歌唱が盛り上がるような讃美歌が選ばれている」ということであった。選ばれた讃美歌の特徴について、やはり序文では、

「ここにある讃美歌は今日までずっと歌われているもので、古くなって使われなくなったものはない。すでに標準となった新しい讃美歌が載っている。長さも楽しさも充分あり、信心深い人にも気に入られ、若者にも子どもにも人気のある歌である。これはリズムカルに語りかける真実を含んでいる「大衆歌」である」

と述べてある。

つまり韓国の最初の讃美歌の出典の一つとなった「The Epworth Hymnal」とは、編纂者たち自身が「大衆歌」と認識していた宗教歌を集めたものであった。

これらの「大衆歌」はアメリカでもラジオやレコードといったマスメディアが出現した後の「大衆歌」の基礎となった歌であり、それに強く影響された韓国初期讃美歌が、後の韓国の大衆歌の基礎となってゆくのは、いわば当然と言っていい筋道であったと言ってよい。

一例をあげると、第241番の「Garden」というチューン・ネームの讃美歌は、日本では「真白き富士の根」として洋楽調の最初の流行歌になった歌であり、韓国でも「希望歌」という最初の大衆歌謡となった歌であった。

THE
EPWORTH HYMNAL

CONTAINING

STANDARD HYMNS OF THE CHURCH,

SONGS FOR THE SUNDAY-SCHOOL,

SONGS FOR SOCIAL SERVICES,

SONGS FOR THE HOME CIRCLE,

SONGS FOR SPECIAL OCCASIONS

CINCINNATI:
JENNINGS & GRAHAM.

NEW YORK:
EATON & MAINS.

Copyright, 1893, by Phillips & Hunt, New York.

図9 Epworth Hymnal の中表紙

表1 The Epworth Hymnalの Tune Name 一覧

讃美歌番号 Tune Name

1	Old Hundred	32	Sabbath Home
2	Azmon	33	Mendebas
3	Peterborough	34	Heber
4	Wake the song	35	Sabbath morn
5	Duke Street	36	Swabia
6	Luther	37	Fathee Most Holy
7	Come and worship	38	Give Praise to God
8	Italian Hymn	39	God is God
9	Hendon	40	God is Love
10	Heavenly father we adore thee	41	The Love of God
11	Malvern	42	Manoah
12	Grateful Praise	43	Evan
13	Blessed Hour of Prayer	44	Praise for His Greatness
14	Supplication	45	Lyons
15	Sicily (Sicilian Hymn)	46	Nicea
16	Sicily (Sicilian Hymn)	47	Wellesley
17	Zephyr	48	In the Field with their Flocks
18	Gottshalk	49	Song of the Angels
19	Evening Hymn	50	Antioch
20	Vespers	51	Christmas
21	Eventide	52	Herald Angels
22	Stockwell	53	This is the winter Morn
23	Hursley	54	Waken, Chrisian children
24	Hursley	55	Bethlehem
25	Setting Sun	56	Communion
26	God be with You	57	Euchaarist
27	Twilight	58	Rathbun
28	Evening Prayer	59	The Saviour's Tomb
29	Parting Hymn	60	Morning Red
30	Angel's Voices	61	Now all the Bells are Ring
31	My Sabbath Song	62	Easter Hymn

63	God hath Sent his Angels	98	Silver Street
64	Ascension	99	I do believe
65	Coronation	100	Everlasting love
66	Crown Him	101	Cowper
67	Autumn	102	Cleansing wave
68	Ortonville	103	The gospel bell
69	Tell me more about Jesus	104	O, come at once to Jesus
70	Emmons	105	Weary of earth, and laden
71	Holy Cross	106	Horton
72	I sing of his Mercy	107	Pleyel's Hymn
73	Come, Christian children	108	Jesus is calling
74	The name of our salvation	109	Blumenthal
75	Sing of Jesus, sing forever	110	Mercy
76	The song of the children	111	Come, come to Jesus!
77	Crusader's Hymn	112	Come to Jesus
78	When, his salvation bringing	113	Ingham
79	The children's christ	114	Boylston
80	O, let us be clad	115	Weary child
81	Saviour, blessed savior	116	Invitation accepted
82	My shepherd	117	There is a friend
83	My shepherd	118	Pleading with thee
84	No name so sweet	119	Pass me Not
85	St. Martins	120	Come to the Fountain
86	New Haven	121	Who'll be the next
87	Holy spirit, faithful guide	122	To Jesus I will go
88	Zephyr	123	None but Jesus
89	Armenia	124	The gospel call
90	Bread of Life	125	Toplady
91	Uxbridge	126	Even Me
92	Dover	127	Why do you Wait?
93	Louvan	128	Take me as I am
94	Downs	129	Hallelujah ! `Tis Done
95	Free grace	130	Woodworth
96	Greenville	131	I am trusting Load
97	Wonderful words	132	Freely for me

133	Portuguese Hymn (Adeste Fideles)	168	Invitation
134	Love Divine	169	Lenox
135	Balerna	170	Lebanon
136	Avon	171	Brown
137	Look up	172	Olivet
138	St. Hilda	173	I need thee
139	Fear not!	174	Duane Street
140	Hide Thou Me	175	Aletta
141	Lead thou me	176	All the way my Saviour Leads me
142	Tell it to Jesus	177	Blessed Assurance
143	Jesus, my portion	178	The Solid rock
144	The christian's hiding place	179	Green wood
145	Savior like a Shepherd	180	He Leadeth Me
146	Fathful shepherd	181	Naomi
147	Bethany	182	Never alone
148	More Love to Thee	183	A brother's care
149	The young christian	184	Safe in the arms of Jesus
150	Happy Day	185	Saviour, teach me
151	Rockingham new	186	The Lord will provide
152	All for thee	187	Father, lead me
153	Precious promise	188	Lux Benigna
154	Alone with Jesus	189	Thine for ever
155	It is well with my soul	190	Trusting in his word
156	Zion	191	Milwaukee
157	Flemming	192	God's anvil
158	A wonderful joy	193	The will of God
159	Henley	194	Come, ye disconsolate
160	Precious Name	195	I will sing for Jesus
161	In the secret of his presence	196	Saviour, listen
162	Christ is near thee	197	O, my saviour, hear me
163	Jewett	198	Retreat
164	Seymour	199	Sweet Hour
165	What a Friend	200	Jesus, my all
166	Nettleton	201	Selvin
167	Ariel	202	Refuge

203	Keep thou may way	238	Awake, my soul
204	My time are in thy hand	239	Up for Jesus stand
205	Yield Not to Temptation	240	Austria Hymn
206	Whiter than Snow	241	St. Thomas
207	Sing always	242	Garden
208	Dare to do right	243	Aurelia
209	Will Jesus fine us watching?	244	Endsleigh
210	Is my name written there	245	Blow the trumpet
211	Child of a king	246	Webb
212	Marching to Zion	247	Missionary Hymn
213	I love to tell the Story	248	Over the ocean wave
214	Arlington	249	Jesus shall reign
215	Maitland (Maland)	250	Arise, go forth to conquer
216	My youth is thine	251	Church rallying song
217	Can you not watch one little	252	Stand up for Jesus
218	Something for Jesus	253	Rescue the perishing
219	Revive us again	254	To the work
220	Earnestly fighting for Jesus	255	The call for reapers
221	Just a Word	256	Gather then in
222	When the king comes in	257	Tell it out
223	Take up the cross	258	Final victory
224	Battling for the Lord	259	Dennis
225	Victory (Palestrina)	260	Nuremberg
226	Seeds of promise	261	Heaven is my home
227	I love to sing the story	262	Shining Shore
228	Work Song	263	I'm a Pilgrim
229	Caledonia	264	Northfield
230	Some work to do	265	Alida
231	Sound the battle-cry	266	The saint's home
232	Keep tot he right	267	Welcome to glory
233	Strike for victory	268	Frederick
234	Webb	269	Exhortation
235	Courage	270	Varina
236	Onward	271	Jerusalem the golden
237	Elmswood	272	Shall we gather at the river

273	We shall Meet	308	Jubilate deo
274	What a meeting that will be!	309	Benedictus
275	Shall we know each other?	310	Deus misereatur
276	Beulah Land	311	Donum est confiteri
277	Sweet By and-By	312	Dominus Regit Me
278	Angels' Song	313	Venite
279	Father, lead thy little children	314	Gloria inn excelsis
280	Jesus loves me	315	Responses to the
281	Jesus bids us shine	316	Thy will be done
282	I think when I read	317	The Lord's prayer
283	Jesus loves the children	318	Gloria Patri
284	Dear Jesus, here me	319	Tedeum laudamus
285	O what can you tell		
286	God is in heaven!		
287	Lead me, precious saviour		
288	Growing up for Jesus		
289	Dear saviour, ever at my side		
290	Sunbeams		
291	Beautiful, the little hands		
292	Little buds of promise		
293	Come with rejoicing		
294	Our glad jubilee		
295	Thanksgiving hymn		
296	Harvest home		
297	Summer Sunshine		
298	Autumn leaves		
299	America		
300	Monkland		
301	No compromise		
302	We'll help the cause along		
303	God speed the right		
304	The sparkling rill		
305	Benevento		
306	Ernan		
307	Venite		

第3章 韓国の初期讃美歌集の相互の影響関係と出典とについて

1. メソジストと長老派との共同（翻訳）作業の経緯

韓国讃美歌集の出発点となった1892年のメソジスト讃美歌集「讃美歌」について、アンダーウッドは次のように言う。

「最初の讃美歌集の需要をまかなったのは、Rev. Heber Jones が2年前に出版したものであった。それは当時使われていたほとんど全ての讃美歌を納めたもので、およそ30ばかりであったが、歌詞のみの本であった。」（1893年9月の日付のあるアンダーウッドの讃美歌集（1894）の序文より）

これを基礎にメソジストと長老派との讃美歌翻訳共同作業が開始されたことについて、アンダーウッドは次のように言う。

メソジストが指名したRev. Heber Jonesと長老派が指名した Rev. S. A. Moffett の指導のもとでより大部のものが続刊中で、50の讃美歌が集められた。これらすべては両方のミッションで使われるもので、そのおよそ半分は私がアメリカに帰国する前に翻訳したものである。

ジョンズ氏が留守の間、この仕事は私が引き継ぎ、この版に使用した」

メソジスト側の委員ジョンズ氏が留守の間、アンダーウッドが代わりに仕事をした事情は次のようなものであった。

「韓国に戻ってみると多くの仕事が遅れていて、中でも讃美歌集の仕事が。讃美歌集は使われていず、掛け軸（スクロール）を使って歌われていた。メソジストの委員は中国にいて仕事が遅れていたので、さまざまな讃美歌と曲を改善するようにモフェットは私に頼んだ」（アンダーウッド書簡、1893年 10月28日）

そもそも最初の企画は、メソジストのジョンズと長老派のモフェットが共同で編纂した讃美歌集は、「両方のミッションで使われるもの」であった。

しかし、ジョンズが中国に行って留守の間、その分の仕事はモフェットの要請によってアンダーウッドに任された。

その結果はしかし、「両方のミッションで使われる」讃美歌集は刊行されず、なぜか、アンダーウッドの編纂になる讃美歌集が出版された。

その理由の一つは、集められた50曲の讃美歌の「およそ半分は私（アンダーウッド）がアメリカに帰国する前に翻訳したもの」であったからであろう。」

「ジョンズ氏が留守の間、この仕事（両方のミッションで使用する讃美歌集の編纂の仕事）は私が引き継ぎ、この版に使用した」事情について、アンダーウッドは次のように説明している。

「古い讃美歌はほとんど私の翻訳である。さらに50ばかりの讃美歌を加え、結果、この本では106の讃美歌になり、そのほとんどは私が翻訳したものである」（アンダーウッド書簡、1893年 10月28日）

アンダーウッドのみが目立つ讃美歌集の編纂と刊行について、長老派では問題となった。ア

ンダーウッドはメソジストからは理解が得られていることについて、次のように自分を弁護した。

「メソジスト・ミッションは私を十分に信頼してくれて、讃美歌編纂委員会に彼らの仕事を中止することを命じた。私がゲラ刷りを送ると申し出たが、彼らは謝絶し、私の讃美歌集を認め、彼らの教会用として使うことを決めた」（アンダーウッド書簡、1893年 10月28日）

しかし、長老派は納得せず、アンダーウッドに刊行準備中の讃美歌集のゲラ刷りを提出させ、ミッションの正式讃美歌と認知するか否か検討する、としたことについては、後で詳しく述べる通りである。

ともかくアンダーウッドが独自で讃美歌集を刊行したことで、メソジストと、そして長老派でも讃美歌編集委員会による独自の讃美歌集を刊行することになった。

メソジストの2冊目の讃美歌集は1895年に出版された。アンダーウッドおよび長老派讃美歌編集委員会の仕事との関係について、編纂したジョンズは次のように述べている。

「1892年以来、韓国教会の讃美歌学を（一字不明）するための努力によって、進歩のための偉大な一歩がしるされた。仕事のこの方面で最も功績のあったアンダーウッド牧師は1894年にChan Yang Ka を出版した。つい最近プレスビテリアンの兄弟は編集委員会によって讃美歌集を出版した。われわれはChan Yang Ka に謝意を表したいと思う」（「讃美歌」1895年序文より）

アンダーウッド編纂の「讃揚歌（1894年）」との関係について、ジョンズは、アンダーウッドの讃美歌から引用したものは14,21,22,23,50,52,56,58,61,65,66,67,70番であると、具体的に指摘している。

アンダーウッドの貢献については、「讃美歌」（1897年、第3版）では、アンダーウッドの讃美歌から引用したものは、14,21,22,23,50,52,53,56,58,61,65,66,67,73番であるとし、「讃美歌（1900年、第5版）」では、「Chan-mi-ka の第5版を出すに当たっては、Chan-yang-kaの編集者アンダーウッド牧師に多くの負っている」と謝意を表している。

長老派讃美歌編集委員会編纂「讃聖詩（1995年）」との関係について、ジョンズは「讃美歌（1895年）」では、次のように具体的に指摘している。

「29,31,32,33,40,41,62,63,74,80番の讃美歌はベアード夫人に負っている」

「讃美歌（1897年、第3版）」では、

「29,31,32,33,40,41,62,63,74,80番の讃美歌はベアード夫人に、51番はミス・ドティに負っている」と述べ、「讃美歌（1900年、第5版）」では、「数々の優れた点をもつ讃美歌集Chan-sung-si の北長老派編集委員会にも多く負っている」と謝意を表している。

メソジストと長老派が共同して一致讃美歌集を刊行するに至るには、1908年まで待たなければならなかったが、以上見て来たように、両派は讃美歌の翻訳では互いに協力していた。その過程で、両派ともアンダーウッドの讃美歌翻訳の先駆的業績を無視できず、それはアンダーウッドの独自の讃美歌集の編纂と刊行を認めることになり、それは一面では一致讃美歌集

刊行を遅らせ事情として働いたと考えられる。

アンダーウッドの業績を無視できなかったのは、彼の翻訳による讃美歌が韓国人に最初に歌われ、定着したからであったと思われる。

アンダーウッドの独走的な讃美歌集の刊行は、長老派ミッション内部で対立を生み、アンダーウッドと讃美歌編集委員会がそれぞれ別の讃美歌集を刊行するという事態に至る。1895年にアンダーウッドが刊行した「讃揚歌」がすでに151番の讃美歌を収録しているのに、同じ年に編集委員会によって刊行された「讃聖詩」はわずかに54番の讃美歌しか含んでいない、という不釣り合いを露呈している。長老派ミッション内部での讃美歌集刊行をめぐる対立は、メソジストとの共同刊行を遅らせたことは否めない。

2. 韓国讃美歌の出典について

長老派で採用された讃美歌については、出典が特に記されていないが、ただ、アンダーウッドが、「大部分は人気のある家庭用宗教歌 (more popular home sacred songs) から翻訳した。残りは韓国人の作詞である」と述べているだけである。

メソジストの讃美歌に関しては、「讃美歌 (1895年)」の序文で、「曲に関しては、出来るだけMethodist Hymnalを参照した。ヘッドラインのM. M. はMethodist Hymnalを、G. H. はGospel Hymns consolidatedを意味している」と述べてある。

「Methodist Hymnal」はメソジストの公式讃美歌集である。

「Gospel Hymns consolidated」は、ニューヨークの「Biglow & Main」から1883年に出版されたもので、副題によると、1号から4号までの重複を除いた合本で、福音集会やその他の宗教礼拝用である。

出典としてさらに序文は、「別の本から曲を選んだ場合は、本のフルネームを書いておいた」と述べている。

したがって、メソジストの讃美歌集では、各讃美歌の出典が表記されているので影響関係を考えるには貴重である。

出典としてフルネームで表記されているのは以下の讃美歌集である。

「Chan Yang Ka」。

「Epworth Hymnal」

「Franklin Square Coll.」

この内、「Chan Yang Ka」はアンダーウッドが編纂して1894年刊行した讃美歌集「讃揚歌」である。

「Epworth Hymnal」は、シンシナティの「Jennings & Graham」によって1885年に出版された讃美歌集で、「教会の標準的な讃美歌、日曜学校の歌、街頭礼拝の歌、家庭集会の歌、特別な機会の歌を収録」と副題は謳っている。

「Franklin Square Coll.」は「Franklin Square Song Collection」のことで、J. P. MaCaskey が編纂し、American book という出版社から出された。1881年から1891年

まで8巻ほど出版された（第1巻、1881年、第2巻1884年、第3巻1885年、第4巻1887年、第5巻1888年、第6巻1889年、第7巻不明、第8巻1891年）。

表2 韓国メソジスト初期讃美歌集一覧

出版年	韓国語表題	英語表題	編者	曲数
1892	讃美歌 Chang Mi Ka		George A Jones, Louise C Rothweiler	27
1895	讃美歌 第1版 Chang Mi Ka	A Selection of Hymns for the Korean Church	George Heber Jones, Louise C Rothweiler	81
1897	讃美歌 第2版 Chang Mi Ka	A Selection of Hymns for the Korean Church	George Heber Jones, L. C. Rothwiler, D. A. Bunker	90
1897	讃美歌 第3版 Chang Mi Ka	A Selection of Hymns for the Korean Church	George Heber Jones, L. C. Rothwiler, D. A. Bunker	90
189?	讃美歌 第4版 Chang Mi Ka	A Selection of Hymns for the Korean Church	George Heber Jones, L. C. Rothwiler	90
1900	讃美歌 第5版 Chang Mi Ka	A Selection of Hymns for the Korean Church	George Heber Jones, L. C. Rothwiler	176
1902	讃美歌 第6版 Chang Mi Ka	A Selection of Hymns for the Korean Church	George Heber Jones	205
1904	讃美歌 第7版 Chang Mi Ka	A Selection of Hymns for the Korean Church	Committee	
1905	讃美歌 第8版 Chang Mi Ka	A Selection of Hymns for the Korean Church	Committee	183

"Study on the Reception History of Modern Korean Church Music" より

表 3 長老派初期讃美歌集一覧

出版年	韓国語表題	英語表題	出版教派	編者	曲数
1894	讃揚歌 第1版	Hymns of Praise	南長老派	Horace Grant Underwood	117
1895	讃揚歌 第2版		南長老派	Horace Grant Underwood	151
1895	讃聖詩 第1版		北長老派	Graham Lee, Gifford	54
1896	讃揚歌 第3版		南長老派	Horace Grant Underwood	
1898	讃揚歌 第4版		南長老派	Horace Grant Underwood	164
1898	讃聖詩 第2版	Psalms and Hymns	北長老派	Graham Lee, Gifford	84
1900	讃揚歌 第4版		南長老派	Horace Grant Underwood	182
1900	讃聖詩 第3版		北長老派	Graham Lee, Gifford	87
1902	讃聖詩		北長老派		123
1905	讃聖詩 第9版		北長老派		151
1906	讃聖詩 第11版		北長老派		151

"Study on the Reception History of Modern Korean Church Music" より

表4 讚美歌（1895年）出典・翻訳者一覧

<u>讚美歌番号</u>	<u>Tune Name</u>	<u>讚美歌集名</u>	<u>訳者名</u>
1	Old Hundred	Methodist Hymnal	
2	Duke Street	Methodist Hymnal	
3	Azmon	Methodist Hymnal	
4	Nicea	Methodist Hymnal	
5	Migdol	Methodist Hymnal	
6	Old Hundred	Methodist Hymnal	
7	Stockwell	Methodist Hymnal	
8	Lyons	Methodist Hymnal	
9	Boylston	Methodist Hymnal	
10	Old Hundred	Methodist Hymnal	
11	Woodworth	Methodist Hymnal	
12	St. Martins	Methodist Hymnal	
13	New Haven	Methodist Hymnal	
14	Mercy	Methodist Hymnal	Dr. Un derwood
15		Methodist Hymnal	
16	Antioch	Methodist Hymnal	
17	Avon	Methodist Hymnal	
18	Cleaving fountain	Methodist Hymnal	
19	Avon	Methodist Hymnal	
20	What hast thou done	Gospel Hymns consolidated	
21	Hamburg	Methodist Hymnal	Dr. Un derwood
22		Gospel Hymns consolidated	Dr. Un derwood
23	Olivet	Methodist Hymnal	Dr. Un derwood
24	Rialto	Methodist Hymnal	
25	Essex	Methodist Hymnal	
26	Hursley	Methodist Hymnal	
27	Coronation	Methodist Hymnal	
28	Migdol	Methodist Hymnal	
29		Gospel Hymns consolidated	Mrs. Baird
30	Woodland	Methodist Hymnal	
31	Olivet	Methodist Hymnal	Mrs. Baird
32	My Jesus, I love thee	Gospel Hymns consolidated	Mrs. Baird

33	Naomi	Methodist Hymnal	Mrs. Baird
34	Greenville	Methodist Hymnal	
35	Come ye Sinners	Methodist Hymnal	
36	Woodworth	Methodist Hymnal	
37	Repose	Methodist Hymnal	
38	Seymour	Methodist Hymnal	
39		Gospel Hymns consolidated	Mrs. Noble
40	Varina	Methodist Hymnal	Mrs. Baird
41	I am coming to the Cross	Gospel Hymns consolidated	Mrs. Baird
42	Ward	Methodist Hymnal	
43	Pass me Not	Gospel Hymns consolidated	Mrs. Jones
44	Toplady	Methodist Hymnal	
45	Martyn	Methodist Hymnal	
46	Jesus loves me	Epworth Hymnal	
47	Wondrous Love	Gospel Hymns consolidated	
48		Gospel Hymns consolidated	
49	Wondrous Story	Finest of the Wheat	Mrs. Noble
50	More Love to Thee	Methodist Hymnal	Dr. Un derwood
51	Love Divine	Methodist Hymnal	
52	Aurelia	Methodist Hymnal	Dr. Un derwood
53	Woodworth	Methodist Hymnal	Korean Woman
54	Nettleton	Methodist Hymnal	
55	Arlington	Methodist Hymnal	
56	Segur	Chan Yang Ka	Dr. Un derwood
57	Bethany	Methodist Hymnal	
58	Faber	Chan Yang Ka	Dr. Un derwood
59	Duke Street	Methodist Hymnal	
60	Happy Day	Epworth Hymnal	
61	He Leadeth Me	Methodist Hymnal	Dr. Un derwood
62	Dijon	Methodist Hymnal	Mrs. Baird
63	Anywhere with Jesus	Chan Yang Ka	Mrs. Baird
64		Epworth Hymnal	
65	Guidance	Methodist Hymnal	Dr. Un derwood
66		Gospel Hymns consolidated	Dr. Un derwood
67	I love to tell the Story	Gospel Hymns consolidated	Dr. Un derwood
68	Laban	Methodist Hymnal	

69	Boylston	Methodist Hymnal	
70	I am Thine O Lord	Gospel Hymns consolidated	Dr. Underwood
71	Dennis	Methodist Hymnal	
72	Spanish Hymn	Methodist Hymnal	
73	Missionary Hymn	Methodist Hymnal	
74	Simple Trusting	Gospel Hymns consolidated	Mrs. Baird
75	Azmon	Methodist Hymnal	
76	Rest	Methodist Hymnal	
77	We shall Meet	Gospel Hymns consolidated	Mrs. Noble
78	Hindustan (Happy Land)	Chan Yang Ka	
79	Hindustan (Happy Land)	Chan Yang Ka	
80	Art thou weary?	Methodist Hymnal	Mrs. Baird
81	Chant	Methodist Hymnal	

表5 讃美歌（1897年）出典・翻訳者一覧

<u>讃美歌番号</u>	<u>Tune Name</u>	<u>讃美歌集名</u>	<u>訳者名</u>
1	Old Hundred	Methodist Hymnal	
2	Duke Street	Methodist Hymnal	
3	Azmon	Methodist Hymnal	
4	Nicea	Methodist Hymnal	
5	Migdol	Methodist Hymnal	
6	Old Hundred	Methodist Hymnal	
7	Stockwell	Methodist Hymnal	
8	Lyons	Methodist Hymnal	
9	Boylston	Methodist Hymnal	
10	Old Hundred	Methodist Hymnal	
11	Woodworth	Methodist Hymnal	
12	St. Martins	Methodist Hymnal	
13	New Haven	Methodist Hymnal	
14	Mercy	Methodist Hymnal	Dr. Un derwood
15		Franklin Square Song Collection	
16	Antioch	Methodist Hymnal	
17	Avon	Methodist Hymnal	
18	Cleaving fountain	Methodist Hymnal	
19	Avon	Methodist Hymnal	
20	I gave my life for thee	Gospel Hymns consolidated	
21	Hamburg	Methodist Hymnal	Dr. Un derwood
22		Gospel Hymns consolidated	Dr. Un derwood
23	Olivet	Methodist Hymnal	Dr. Un derwood
24	Rialto	Methodist Hymnal	
25	Essex	Methodist Hymnal	
26	Hursley	Methodist Hymnal	
27	Coronation	Methodist Hymnal	
28	Migdol	Methodist Hymnal	
29		Gospel Hymns consolidated	Mrs. Baird
30	Woodland	Methodist Hymnal	Mrs. Noble
31	Olivet	Methodist Hymnal	Mrs. Baird
32	My Jesus, I love thee	Methodist Hymnal	Mrs. Baird
33	Naomi	Methodist Hymnal	Mrs. Baird
34	Greenville	Methodist Hymnal	

35	Come ye Sinners	Methodist Hymnal	
36	Woodworth	Methodist Hymnal	
37	Repose	Methodist Hymnal	
38	Seymour	Methodist Hymnal	
39		Gospel Hymns consolidated	
40	Truman	Methodist Hymnal	Mrs. Baird
41	I am coming to the Cross	Gospel Hymns consolidated	Mrs. Baird
42	Ward	Methodist Hymnal	
43	Pass me Not	Gospel Hymns consolidated	Mrs. Jones
44	Toplady	Methodist Hymnal	
45	Martyn	Methodist Hymnal	
46	Jesus loves me	Epworth Hymnal	
47		Gospel Hymns consolidated	
48		Gospel Hymns consolidated	
49	Wondrous Story	Finest of the Wheat	Mrs. Noble
50	More Love to Thee	Methodist Hymnal	Dr. Un derwood
51	Love Divine	Methodist Hymnal	Miss Doty
52	Aurelia	Methodist Hymnal	Dr. Un derwood
53	Woodworth	Methodist Hymnal	Dr. Un derwood
54	Nettleton	Methodist Hymnal	
55	Arlington	Methodist Hymnal	
56	Zion	Methodist Hymnal	Dr. Un derwood
57	Bethany	Methodist Hymnal	
58	Wellesley	Methodist Hymnal	Dr. Un derwood
59	Duke Street	Methodist Hymnal	
60	Happy Day	Epworth Hymnal	
61	He Leadeth Me	Methodist Hymnal	Dr. Un derwood
62	Dijon	Methodist Hymnal	Mrs. Baird
63	Anywhere with Jesus	Chan Yang Ka	Mrs. Baird
64		Epworth Hymnal	Mrs. Noble
65	Guidance	Methodist Hymnal	Dr. Un derwood
66		Gospel Hymns consolidated	Dr. Un derwood
67	I love to tell the Story	Gospel Hymns consolidated	Dr. Un derwood
68	Laban	Methodist Hymnal	
69	Boylston	Methodist Hymnal	
70	I am Thine O Lord	Gospel Hymns consolidated	
71	Dennis	Methodist Hymnal	
72	Spanish Hymn	Methodist Hymnal	

73	Missionary Hymn	Methodist Hymnal	Dr. Underwood
74	Simple Trusting	Gospel Hymns consolidated	Mrs. Baird
75	Azmon	Methodist Hymnal	
76	Rest	Methodist Hymnal	
77	We shall Meet	Gospel Hymns consolidated	Mrs. Noble
78	Hindustan (Happy Land)	Chan Yang Ka	
79	Hindustan (Happy Land)	Chan Yang Ka	
80	Stephanos	Gospel Hymns consolidated	Mrs. Baird
81	Lenox	Methodist Hymnal	
82	Grace	Methodist Hymnal	
83	Azmon		
84	Olivet	Methodist Hymnal	
85	Father, lead thy little children	Epworth Hymnal	Miss Levis
86	I need thee	Methodist Hymnal	
87	Woodworth	Methodist Hymnal	Student of Pai Chai
88	Stockwell	Methodist Hymnal	
89	Happy Day	Epworth Hymnal	Girls of I Fa Hakutan
90		Methodist Hymnal	Dr. Scranton

表6 讚美歌（1900年）出典一覽

<u>讚美歌番号</u>	<u>Tune Name</u>	<u>讚美歌集名</u>
1	Old Hundred	Methodist Hymnal
2	Duke Street	Methodist Hymnal
3	Missionary chant	Methodist Hymnal
4	Nicea	Methodist Hymnal
5	Azmon	Methodist Hymnal
6	Sabbath morn	Methodist Hymnal
7	Migdol	Methodist Hymnal
8	Old Hundred	Methodist Hymnal
9	Duke Street	Methodist Hymnal
10	Ernan	Methodist Hymnal
11	Germany	Methodist Hymnal
12	Rockingham new	Methodist Hymnal
13	Old Hundred	Methodist Hymnal
14	Duke Street	Methodist Hymnal
15	Hebron	Methodist Hymnal
16	Stockwell	Methodist Hymnal
17	Seymour	Methodist Hymnal
18	Simpson	Methodist Hymnal
19	Hursley	Methodist Hymnal
20	Stockwell	Methodist Hymnal
21	Rockingham new	Methodist Hymnal
22	Ariel	Methodist Hymnal
23	Italian Hymn	Methodist Hymnal
24		Franklin Square Song Collection
25	Antioch	Methodist Hymnal
26	Happy Day	Epworth Hymnal
27	Herald Angels	Methodist Hymnal
28	Not my own	Gospel Hymns consolidated
29	Naomi	Methodist Hymnal
30	I gave my life for thee	Gospel Hymns consolidated
31	Avon	Methodist Hymnal
32	Avon	Methodist Hymnal

33	Hamburg	Methodist Hymnal
34		
35	Olivet	Methodist Hymnal
36	Toplady	Methodist Hymnal
37	Ware	Methodist Hymnal
38	Dulcetta	Methodist Hymnal
39	Migdol	Methodist Hymnal
40	My Jesus, I love thee	Gospel Hymns consolidated
41	Hummel	Methodist Hymnal
42	Olivet	Methodist Hymnal
43	Wagh	Methodist Hymnal
44	Martyn	Methodist Hymnal
45	Welton	Methodist Hymnal
46	Holy Cross	Methodist Hymnal
47	Rialto	Methodist Hymnal
48	Essex	Methodist Hymnal
49	Essex	Methodist Hymnal
50	Coronation	Methodist Hymnal
51	Nettleton	Methodist Hymnal
52	St. Martins	Methodist Hymnal
53	New Haven	Methodist Hymnal
54	Mercy	Methodist Hymnal
55	Azmon	Methodist Hymnal
56	St. Cuthbert	New Laudes Domini
57	Woodland	Methodist Hymnal
58	Repose	Methodist Hymnal
59	Aurelia	Methodist Hymnal
60	Wellesley	Methodist Hymnal
61	Rockingham new	Methodist Hymnal
62	Boylston	Methodist Hymnal
63	Greenville	Methodist Hymnal
64	Woodworth	Methodist Hymnal
65	Seymour	Methodist Hymnal
66	To-day	Gospel Hymns consolidated
67	Expostulation	Methodist Hymnal
68	I am Coming	Gospel Hymns consolidated

69	Ward	Methodist Hymnal
70	Pleyel's Hymn	Methodist Hymnal
71	Woodworth	Methodist Hymnal
72	What a Friend	Methodist Hymnal
73	Martyn	Methodist Hymnal
74	Truman	Methodist Hymnal
75	Migdol	Methodist Hymnal
76	Missionary chant	Methodist Hymnal
77	Stephanos	Laudes Domini
78	Work Song	Methodist Hymnal
79	St. Thomas	Methodist Hymnal
80	Webb	Methodist Hymnal
81	Parsons	Methodist Hymnal
82	Sweet Hour	Methodist Hymnal
83		Methodist Hymnal
84	Amsterdam	Methodist Hymnal
85	Arlington	Methodist Hymnal
86	Zion	Methodist Hymnal
87	He Leadeth Me	Methodist Hymnal
88	Bethany	Methodist Hymnal
89	Dijon	Methodist Hymnal
90	Laban	Methodist Hymnal
91	Boylston	Methodist Hymnal
92	Dennis	Methodist Hymnal
93	Spanish Hymn	Methodist Hymnal
94	Missionary Hymn	Methodist Hymnal
95	Lenox	Methodist Hymnal
96	More Love to Thee	Methodist Hymnal
97	Dornance	New Laudes Domini
98	Repose	Methodist Hymnal
99	St. George	Methodist Hymnal
100		Gospel Hymns consolidated
101	Autumn	Methodist Hymnal
102	Solitude	New Laudes Domini
103	Harwell	New Laudes Domini
104		Triumphant Hymns No. 2

105	Love Divine	Methodist Hymnal
106	Stockwell	Methodist Hymnal
107	Jewett	Methodist Hymnal
108	Green wood	Methodist Hymnal
109	Olumutz	Methodist Hymnal
110	Rest	Methodist Hymnal
111		Gospel Hymns consolidated
112	Hindustan (Happy Land)	Chan Yang Ka
113	Hindustan (Happy Land)	Chan Yang Ka
114	Love Divine	Methodist Hymnal
115	Martyn	Methodist Hymnal
116	Missionary chant	Methodist Hymnal
117	Lyons	Methodist Hymnal
118	Ames	Methodist Hymnal
119	Newbold	Methodist Hymnal
120	Ewing	Methodist Hymnal
121	Hamburg	Methodist Hymnal
122	Novelle	Methodist Hymnal
123	Hallelujah! what a Saviour	Gospel Hymns consolidated
124	Shining Shore	
125	Maitland (Maland)	Methodist Hymnal
126	Varina	Methodist Hymnal
127	Rockingham new	Methodist Hymnal
128	Come, ye disconsolate	Methodist Hymnal
129	Zephyr	Methodist Hymnal
130	Aurelia	Methodist Hymnal
131	Duke Street	Methodist Hymnal
132	Meribah	Methodist Hymnal
133	More about Jesus	Finest of the Wheat
134	Cleaving fountain	Methodist Hymnal
135	Since I have been Redeemed	Finest of the Wheat
136		Gospel Hymns consolidated
137	Loving Kindness	New Laudes Domini
138	Hallelujah ! 'Tis Done	Gospel Hymns consolidated
139		Gospel Hymns consolidated
140	The great Phsician	Gospel Hymns consolidated

141		Gospel Hymns consolidated
142	Come ye Sinners	Methodist Hymnal
143		Gospel Hymns consolidated
144	He Leadeth Me	Methodist Hymnal
145		Finest of the Wheat
146	More to Follow	Gospel Hymns consolidated
147	Glory to his Name	Christian Endeavor Hymns
148	Fill me now	Finest of the Wheat
149	Emmons	Methodist Hymnal
150	Pass me Not	Gospel Hymns consolidated
151	Wondrous Story	Finest of the Wheat
152	Happy Day	Epworth Hymnal
153		Epworth Hymnal
154	I am Thine O Lord	Gospel Hymns consolidated
155	Simple Trusting	Gospel Hymns consolidated
156	I need thee	Methodist Hymnal
157		Gospel Hymns consolidated
158	Blessed Assurance	Finest of the Wheat
159	God be with You	Finest of the Wheat
160	Jesus loves me	Epworth Hymnal
161	Father, lead thy little children	Epworth Hymnal
162		Gospel Hymns consolidated
163	Guidance	Methodist Hymnal
164	Jewels	Gospel Hymns consolidated
165	Faben	Methodist Hymnal
166	Old Hundred	Methodist Hymnal
167	Welcome Voice	Gospel Hymns consolidated
168	Only Trust Him	Gospel Hymns consolidated
169	Christmas	Methodist Hymnal
170	Lyons	Methodist Hymnal

表7 讚聖詩（1898年）翻譯者一覽

<u>讚美歌番号</u>	<u>Tune Name</u>	<u>訳者名</u>
1	Harwell	Mr. Swallen
2	Sabbath (morn)	Mrs. Baird
3	Stockwell	Mrs. Baird
4	St. George	Mr. Miller
5	Loving Kindness	Dr. Un derwood
6	Last Hope	Mr. Miller
7		Mr. Fenwick
8	Jesus loves me	Mrs. Baird
9	Guidance	Dr. Un derwood
10	Martyn	Mrs. Baird
11	Toplady	Miss Rothwiler
12	Trusting Jesus	Mrs. Baird
13	Laban	Dr. Un derwood
14	Herald Angels	Dr. Un derwood
15	Revive us Again	Dr. Un derwood
16	Erie	Mrs. Baird
17	Love Divine	Mrs. Baird
18	Coronation	Mr. Jones
19	Martyn	Mr. Miller
20	Haven of Rest	Mr. Swallen
21		Dr. Un derwood
22	My Jesus, I love thee	Mr. Swallen
23		Dr. Un derwood
24	Laban	Dr. Un derwood
25		Dr. Un derwood
26		Mrs. Baird
27	Ellesdie	Mrs. Baird
28	More Love	Dr. Un derwood
29		Dr. Un derwood
30	Seymour	Mrs. Miller
31	He Leadeth Me	Dr. Un derwood
32	Spanish Hymn	Korean Christian
33	Old Hundred	Miss Pery
34	Jesus Saves	Mrs. Baird

35	Hindostan (Happy Land)	Dr. Un derwood
36	Come, ye disconsolate	Mr. Miller
37	Dornance	Mr. Miller
38	The Light of the World	Mrs. Baird
39	Olivet	Mrs. Baird
40	Pilot	Mrs. Baird
41	I am coming to the Cross	Mrs. Baird
42	Repose	Mrs. Baird
43	Woodworth	Mr. Swallen
44	My Jesus, I love thee	Mrs. Baird
45	Boylston	Mrs. Baird
46	Anywhere with Jesus	Mrs. Baird
47	Naomi	Mrs. Baird
48	Scatter seeds of kindness	Mr. Gale
49	Stephanos	Mrs. Baird
50	Varina	Mrs. Baird
51	Segur	Mrs. Baird
52	Bethany	Dr. Un derwood
53		Mrs. Baird
54	Greenville	Mr. Jones
55		Miss Strong
56	Near the Cross	Mrs. Baird
57		Mrs. Baird
58	Avon	Mrs. Baird
59	Solitude	Mrs. Baird
60		Mrs. Baird
61	Mission Song	Miss Pery
62	Hendon	Miss Pery
63	Praise Him	Mrs. Baird
64	Chants	Mr. Jones
65	Chants	Mr. Gale
66	Chant	Dr. Un derwood
67	Chant	Dr. Un derwood
68	Chant	Dr. Un derwood
69	Chant	Mr. Pieters
70	Chant	Mr. Pieters
71	Dijon	Mr. Pieters
72	Armstrong	Mr. Pieters

73	Faben	Mr. Pieters
74	Autumn	Mr. Pieters
75	Old Hundred	Mr. Pieters
76	Essex	Mr. Pieters
77	Praise	Mr. Pieters
78	Pleyel's Hymn	Mr. Pieters
79	Nettleton	Mr. Pieters
80	Consecration	Mr. Pieters
81	Middleton	Mr. Pieters
82	Rock of Ages	Mr. Pieters
83	St. Gertrude	Mr. Pieters
84		

第4章 韓国における讃美歌の普及と医療伝道

日本では有効性が失われつつあった医療伝道が韓国では極めて有益に機能し、入院患者や通院者のために礼拝を行い、外来患者の家庭を訪問し布教がなされたが、その際、讃美歌がとても人気があり、布教に有効であった。また、病院に助手として派遣されたにミッション・スクール生徒はオルガンを弾いたり、歌唱を応援したりして病院での礼拝を助けた。こうして医療伝道と学校教育との間に連携が保たれ、宣教が有効に機能し、それによって讃美歌も普及した。

1. メソジスト派の医療伝道と讃美歌の普及

ソウルで開始されたメソジストの伝道活動で最初に成功したのは医療活動であったようである。最初に派遣された2人の宣教師の一人は医師のスクラントンであったことから、医療伝道が最初から目論まれていたことが分かる。

韓国における医療伝道が成功する切っ掛けについてアッペンゼラーは次のように述べている。

「1884年に鎖国朝鮮において伝道をはじめるとを決定した宣教部が、3人の医師と2人の牧師を、家族とともに派遣したのは賢明なやり方であった。アレン博士が摂理によって、1884年の暴動〔甲申政変〕の直前に到着し、首相と並ぶ地位にある、閔妃お気にいりの甥〔原文は従弟〕の生命を救うことに成功した話は、周知のことなのでくり返し述べる必要はないと思う。しかし当然考えられる通り、このことで博士はただちに宮廷内に好意をもって迎えられたばかりでなく、その好意は博士の医療上の助手ばかりか、伝道にたずさわるもの全員におよび、やがてはアメリカ人全員にまでおよんだ」（「朝鮮の呼び声」102－3頁）

ここで韓国・ソウルにおけるメソジストの医療伝道の展開について簡単に述べると、医療伝道は婦人病院と2つの施療所を中心に行われ、その医療伝道はまた讃美歌が普及する機会ともなった。1892年6月発行の女性のための宣教雑誌（Heathen Woman's Friend）には、次のような記事が掲載されている。

「婦人病院はとても効率的な宣教活動の中心である。・・・宣教活動はまだほんの数行われただけであるが、通りの子どもたちが讃美歌を歌っているのが聞かれる」。

メソジストの医療活動は1885年9月10日にスクラントン博士の家で開始された。（Annual Report 1886, p. 268）

ミス・ハワード博士（Miss Meta Howard, M. D.）が1887年10月31日に到着し、スクラントン博士の病院で患者は見始めた。（A. R. 1888, p. 340）。ハワード博士についてアンダーウッドは、「この頃、また医師であるハワード嬢が女性のために医療活動を始めるために到着し、直ちに施療所を開いた。そのごこれは市の中に二つの施療所を持つ病院となった」（「朝鮮の呼び声」180頁）と述べている。

婦人病院の責任者（Superintendent of Hospital for Woman's Work）であったハワード嬢

が1889年9月に去った後、医師であるシャーウッド（Rosetta Sherwood）が引き継いだ。シャーウッドの婚約者ホール（W. J. Hall, M. D.）がソウルに到着したのは1891年の12月16日であった。

ここで、医療伝道において讃美歌が利用され、それが普及する機会となった様子について見て行く。

ホールの最初の印象は、病院の仕事はとてもはげみとなり、毎朝、礼拝が行われ、通常、参加者は25から30名の間であったという。

診察と治療にやってきた韓国の婦人たちは礼拝に参加するように誘われたのである。診察と治療は最終目標ではなく、それをきっかけにキリスト教に患者を導くことが医療伝道の使命であったから、これは当然のことであった。

1892年12月14日の書簡でホール夫人となったシャーウッド医師はこういった様子を次のように述べている。

「この前の8月の年会ではビショップによって婦人病院の医療活動に再び任命され、それ以来1329人の診療所患者を診察した。18人を病室に収容し、42人を往診した。たくさんの書物と日曜学校シートが販売された。・・・日曜日の午後の礼拝には平均して23名が出席している。現在集会でオルガンを弾いているのはミス・レヴィスで、前にはなかったことなので集会に役立っている」。

レヴィスは婦人海外宣教会から病院の助手として派遣されてきた独身婦人宣教であった。

往診した患者の家庭に招かれることがあり、シャーウッドは梨花女学校の生徒で既婚の聖書婦人（Bible Woman）であるメアリーとミス・レヴィスと一緒に韓国語の讃美歌集と聖書を携えて訪問した。その時、レヴィスが讃美歌を数曲歌い、メアリーが聖書の一節を朗読した。

その時の様子をシャーウッドは次のように細やかに描写している。それは讃美歌が韓国人の間に浸透する様子を描写するものともなっているのので、ここで紹介する。

「ある日曜日の朝、以前の患者の家から依頼された。その小さな子どもは（一字不明）に横になっていた。彼を注意深く診察し必要な薬を与えて後、祖母に質問した。彼女はわれわれに日曜礼拝によく出席していた。彼女は目に涙をためて一生懸命何度も繰り返しながら、神様、どうか5歳の小さな子をお助け下さい、と小さな患者のために祈った。神は子どもを見捨てなかった。家族のみんなが感謝した。それから数ヶ月たった現在、私とレヴィスは週に一度、欠かさず訪問し、彼らと一緒に聖書を読み、讃美歌を歌い、そして祈ります。彼らはいつも私たちを喜んで迎えてくれます。「まるで家族になった」ようです。祖母、母、そして娘は全員で読みます。レヴィスは子どもたちに歌を教えています。彼らは二人とも「幸せの国"There is a happy land"」の言葉を知ってます。この前、彼らのところにいたとき、小さな少女、名前はポペ（Pope）が私に言いました。”おばあさんは毎日お祈りし、決して忘れません”。私はこの家族がじきに受洗を望むようになるだろうと期待しています」

1893年にはシャーウッド・ホール夫人は、「診療所での日曜日午後の礼拝は興味においても、数においても増加した。聖書婦人の2夫人と数人の年長の少女たちが集会の進行をおおいに助けてくれる。式次第はだいたい次のようになっている。最初に1, 2曲の讃美歌、その

後の祈り、・・・・。」

2. 医療伝道と梨花女学堂

集会の進行を助ける数人の年長の少女たちというのは梨花女学校の生徒だと考えられるが、この頃の梨花女学校での讃美歌教育が具体的に分からないのは残念である。女性のための宣教雑誌（Heathen Woman's Friend）の1993年4月号では梨花女学校について次のような記述が見られる。

「添付した写真ではわれわれの最年長の3人の少女が最上階に座っている。右がAnnieで、真ん中がEsterで、その隣がSusannna。少女たちは長年、学校にいて、仕事の立派な助手になった。Annieは休みの間、故郷の親戚たちに教えた。彼女はじきにとても精力的なクリスチャンと結婚し、ボードイン教会に住み、夫と一緒に主の仕事を行う。Esterはとても有能な通訳で、病院の助手である」

このように医療伝道にミッション・スクールの教育活動が連携して、布教活動に成果を挙げていたのである。

少し後の1896年の記述であるが、韓国讃美歌集の編集者であったジョンズ宣教師（Rev. George Heber Jones）は梨花女学校について次のように報告している。

「教育がキリスト教宣教師の宣伝活動の一要素であることは疑いない。梨花学堂には現在47人の寄宿生徒がいる。さらに3人の通学生がいる。優れた音楽家であるハルバート夫人（Mrs. Hulbert）が音楽を教えている」

3. 長老派の医療伝道と讃美歌の普及

病院あるいは診療所で礼拝が行われ、その際、讃美歌が歌われたのは長老派でも同じであった。

長老派の婦人伝道会雑誌「Woman's Work」の1894年第9巻には、次のような記事が掲載されている。

「収容施設(shelter)は通りの裏にあるので、広い道路の真上にある小さな韓国の家を2つ買った。ここにわれわれは礼拝のための教会あるいは礼拝室、診療所、そしてトラクトウスや宗教書売る店を計画した。・・・・

昨日、そこで病気の婦人、病人の出席できる友達、あるいは近所の婦人を集めて婦人のための日曜礼拝をはじめた。われわれはこれらの貧しい、苦しんでいる婦人たちに涙も飢えもない別の世界について語りはじめた。また多くの子どもたちが集まっている世界。ほとんどすべての韓国の婦人は小さな子どもをなくしている。婦人達は喜んで話を聞く。亡くした子どもを再び抱きしめることが出来ること、イエスは彼女たちを愛し、彼女たちを心配していること。私たちは彼女たちを喜ばすために"There is a Happy Land" と "Nothing but the Blood of Jesus" を歌う。彼女たちは夢中になってわたしたちの歌を聴く」

病院の仕事が周辺地域に讃美歌を広めていったことを同じ雑誌の1899年の第14巻所載の次の記事は物語っている。

「ソウルから南に40マイルにあるEmulでの仕事は病院の所産である。一人の祈祷師が彼女の小さな子どもを病院に連れてきた。子どもは治療を受け、祈祷師はクリスチャンになった。彼女は家に帰り、熱心に説いて回った。彼女は文盲だが、自分が聞いたことを説き、いくつかの讃美歌を朗読することを苦心して学び、それを他の人に教えた。現在、彼女の村の4人の婦人が信仰し、日曜礼拝に集まっている。彼女らは一人として読むことが出来ないが、彼女らの礼拝は、祈ることそして習ったわずかな讃美歌を何度も復唱することで成り立っている」。

また、同じ雑誌にはミス・フィールド (Eva H. Field) の次のような報告も載っている。

「ソウルの官立病院で働き始めてから6ヶ月が経った。その間、話を聞くことを望まなかった婦人は一人しか見なかった。・・・・・・

確かに入院患者の仕事は、伝道の観点から最も有効である。午後の診療では非常に多くの患者を診るが、ほんのわずかな時間だし、あるいは薬を待っている時間だけで、彼らはとても話を聞く気分ではない。それに対して数は少ないが入院患者は毎日宣教師か韓国人クリスチャンによって授業を受けている。われわれが病院で働いてからまだ短い期間なのに、数人がキリストの信仰に導かれるのを見るという特権に預かっている。

自殺するつもりで首に長く深い傷を負った一人の婦人がやって来た。彼女は他の婦人に腹を立て、幽霊となって仇の前に現れるつもりであった。彼女は数週間入院し、イエスへの信仰を告白するために去った。彼女は確かに難しい婦人であるが、真に回心してくれるよう望んでいる。数ヶ月前、私は盲目の婦人の目を手術した。手術はうまく行かなかったが、彼女は病院に長くいる間、イエスについて学んだ。目は見えなかったが、信仰によって彼女は幸福で満足しているようだった。彼女にはヘルパーがいて、座って聖書や讃美歌をくり返し聞かせる。こうして彼女は多くのことを学んだ」

日本では明治以降近代医療が急速に整備されていったので、医療伝道は人集めの手段としては次第に有効性を失っていったのであるが、日本でも初期讃美歌の翻訳に医師が関わるが多かったことは、やはり医療伝道との関係で考える必要がある。

韓国では医療伝道は以上見てきたように有効に働き、とりわけ女医の活躍で病院や往診先で礼拝が行われ、そこで讃美歌が歌われていった。

Heathen Woman's Friend

Vol. XXIV.

APRIL, 1893.

No. 10.



THE PEAR FLOWER SCHOOL.

図10 梨花女学校の生徒と宣教師

第5章 韓国における讃美歌の特殊な機能

文字が読めない婦人たちが讃美歌を暗唱することで文字を覚え、讃美歌集は文字を読むことを覚えるためのテキストとなった。

ミラー (F. S. Miller) によれば (Early Korean Hymnology)、「婦人たちは讃美歌を読むために読むことを勉強した。それで讃美歌集も読み方の最も人気のある教科書になった」。

長老派婦人伝道会雑誌「婦人の仕事」の1900年第15巻にある、周辺の村から50人から60人、市内から30人以上集まったというピョンヤンの婦人学級についての記事の中で、文盲の婦人が讃美歌を暗唱する様子について次のように語られている。

10歳から15歳までの4人の少女が母と祖母と一緒にやって来た。彼らは特に歌が習いたいという。Lee氏とMoffett夫人が機会を与えている。彼女たちはとても嬉しそうで、再び来る機会を失うまいと心がけている。50マイル以上の道のりを歩いてやって来る。

田舎から来た一人の老女がミス・ベストに言った。彼女は祈ることができないと。しかし、その後、彼女の部屋にやって来て、頭を下げ、顔のまえに手をかざして、大きな声で祈った。今は、暗唱した讃美歌を次々にくり返している。読むことが出来ないのに、なぜ、覚えたのかと聞かれて、彼女は、毎日夕方、家で夫とともに座り、夫が読み、彼女がくり返す、と答えた。今では彼女は本にあるほとんどすべての讃美歌を知っている。

同じ誌上に文盲の婦人たちが讃美歌を暗唱する様子を述べたホワイティング医師 (Dr. Georgiana Whiting) の報告が掲載されている。

クリスチャンの男性はいないが、3人のクリスチャンの女性がいるEmulに出かけると、改宗した祈祷師にあった。彼女については昨年報告した。彼女は読めないが、今も教師として活動している。多分、ほとんど目が目えず、半ば耳が聞こえない68歳の婦人の声明は、福音書をもっと学びたいという彼女らの願望とその願望を満足させることが難しいことについて、ある観念を与えるであろう。彼女は言った。「私は一文をHan夫人（改宗した祈祷師）から習った。そして忘れた。再び忘れたので、一昨日尋ねた。昨日も尋ねた、しかし今また忘れた。」この婦人はこうした方法で主の祈り (Lord's Prayer) といくつかの讃美歌を学んだ。私たちはHanが新しい讃美歌を覚えるやり方について話した。彼女は讃美歌集を文字を読むことが出来る人のところに持って行って、数行ほど読んでくれるように頼む。彼女が習っている間、周りからたくさんの嘲笑がこぼれた。

こういった婦人たちが、もっと讃美歌を覚えたいと言う気持ちや、文字を習いたいという動機になったものと思える。そして文字を覚えるためのテキストとして讃美歌集が使用されたものと思われる。こうしたことの背景にあったのは、婦人たちが讃美歌をとても好んだことがある。

元山ステーションで活動したスワレン夫人も讃美歌教育と識字教育との関係を次のように伝えている（「婦人の仕事」1896年第11巻）。

「外国の曲で歌う讃美歌の歌唱を導入して以来、大きな紙のシートに讃美歌が書かれ、家の壁に貼られた。婦人たちがこれを学び、すぐに福音書が読めるようになることを期待している」

こうして韓国では、特に女性間で讃美歌集が一番聖書よりも売れたという。何故かという
と、女性は文字を習うのは、聖書を読むためではなく、讃美歌を読みたいから讃美歌集を買った、だから婦人会でもなんでも一番売れたのは、讃美歌集だった、読本としてとても需用があったことが報告されている。

第6章 韓国における讃美歌の歌い方の特徴

韓国では、宣教師がスクロールと読んでいる、讃美歌を大きな文字で書いた全紙を目の前に掛けて歌唱した。

アンダーウッドは讃美歌集の1893年9月の日付のある序文で次のように述べている。

「韓国で教会がはじまるやいなや讃美歌集が必要になった。最初は手で書き写した翻訳を手で書き写したものが用いられたが会員が増加するとこのやり方は不便なので、大きな掛け軸（スクロール）に写された讃美歌を使用し、これを一つ前にぶら下げることで部屋の全員が使う事が出来た」

日本でも「高木玄真筆写本」（推定明治7年）が残っているから、最初の頃は手書きの讃美歌集が使われていたと想像できるが、その後、韓国のように全員でスクロールを使用したことは報告されていない。

スクロールについては、比較文学会での発表の折りに、会場の韓国人大学院留学生から以下のような指摘があった。

「スクロールのことなんですが、スクロールは実は今でも小学生のための幼児学校ではスクロールを使うんです。紙に、全紙？に大きく書いて、それにいちいち本でみるのは子どもは大変ですから、何十枚かあって、それをこうめくりながら・・・ですから、それは一応原始的ですが、子どもの目には・・・大きな字で書いて」

「大きさはどれくらいですか？」

「A3の4倍くらいです。それを今でも使っています」

スワロン夫人（Mrs. Swallen）は元山ステーションからの報告でスクロールについて次のように述べている。（Woman's work, 1896 Vol. 11）

「外国の曲で歌う讃美歌の歌唱を導入して以来、大きな紙のシートに讃美歌が書かれ、家の壁に貼られた。婦人たちがこれを学び、すぐに福音書が読めるようになることを期待している」

また、ゲール夫人（Mrs. Gale）も同じ元山ステーションからスクロールについて次のように報告している。（Woman's work, 1894 Vol. 9）

「10月15日、美しい日曜日の朝、10時半、韓国の人々は礼拝に集まってきた。ゲイル氏は年会のためまだ留守なので、礼拝の指揮はone Yang、年取った教師で改宗者、の手にあった。彼は中国語の聖書を読むことができる。また韓国語に翻訳された福音書も読むことができる。小さな書斎は一杯になった。祈りがはじまり、彼らが立ち上がり、"My faith looks up to Thee, Thou Lamb of Calvary" と讃美歌を大きな文字で書いた自作の油紙のチャート(oiled-paper chart)に向かって立ったとき、これらの茶色の顔に浮かんだ、善良で、真面目な表情に驚かされるであろう」

第7章 オルガンと讃美歌の普及

宣教師は任地への携行品としてリードオルガンを選択することがあった。これは異文化の中で、母国の文化とのつながりを保つため、簡単に言うと、慣れ親しんだ音楽を身近に置くためであった。しかし、実際、任地に赴任してみると、現地人のオルガンへの熱狂ぶりに出会って、オルガンが宣教のための有効な手段であることを認識するようになると、伝道に役に立つ道具としてのオルガンを供えるようになる。韓国でも全く同様のことが宣教師によって報告されている。

メソジストの1885年の年報には「スクラントン医師の医薬、外科手術道具、そしてオルガンのすべて到着した」という記述がある。

また、平壤で医療宣教に従事することになるホール博士(W. J. Hall, M. D.)に対して宣教本部は1892年6月22日付けで、個人の持ち物として小さなオルガン(19ドル)を買うことを承認している。

これらのオルガンはおそらくスクラントン医師やホール博士の家庭の必需品としてアメリカから運んだものと思われる。

オルガンをはじめて見た韓国婦人が驚いた様子について、アンダーウッド夫人(Dr. Lillias Horton Underwood)は1889年9月3日の手紙で次のように述べている。

「われわれの見事な手配によって、婦人たちは男性に会う危険を避けて、女学校の構内を通して、われわれの小さな教会までくることが出来る。講堂(General audience room)からカーテンで仕切った部屋に入り、説教者の近くに座り、すべての礼拝に集まり、聖書を聞くことができる。・・・何人かは雨の日曜日に3マイルの道のりを歩いて来る。出席者は25名になることがある。・・・

多くの婦人が私の家にやってくる。彼女らはオルガン、オルゴール、ミシン、椅子、絵画、鏡、ベッドに驚く。ミス・ハイデン(Miss Hayden)と私はしばしば明るくて、気を引く(bright, striking)讃美歌を数曲歌うと彼女らはとても喜ぶ。帰り際に、主の生涯を描いた絵を見せて、しばしば彼女らに本を与え、日曜礼拝に来るように誘う」

メソジスト婦人伝道会雑誌「Woman's work」1891年第6巻に掲載されたベアード婦人宣教師(Annie Laurie Adams Baird)の書簡にはオルガンを使った婦人会の様子が次のように述べてある。

「小さな一行はギフォードの家へ向かう途中です。そこでは日曜日の夕方にも婦人会があり聖書が教えられたいる。実際、婦人達は日曜日に一日中でもギフォードの家に集まると言いかねません。婦人たちは夕食の前に来始めます。晴れた日には2時半までに50人から60人が床に詰めて座ると、ギフォード夫人が小さなオルガンを弾き、ミス・ドティの学校生徒は自分たちの言葉で"Jesus loves me, this I know," "Nothing but the blood of Jesus," "Happy Land"を歌います」

シャーウッド(Rosetta Sherwood)医師が働いていた婦人病院では毎朝礼拝が行われ、通

常、参加者は25から30名の間であった。この礼拝でオルガンが役だっていることについて、1892年12月14日の書簡でホール夫人となったシャーウッド医師は次のように述べている。

「日曜日の午後の礼拝には平均して23名が出席している。現在集会でオルガンを弾いているのはミス・レヴィスで、前にはなかったことなので集会に役立っている」

1893年の上記雑誌の第8巻には、韓国の婦人たちがオルガンに合わせて讃美歌を歌うことを好んでいる様子を述べた記事が掲載されている。

「韓国の婦人はもちろん好奇心が旺盛で、春、集団で宣教師の家にやってきた。外国の婦人を見たい。それと外国人が使っている珍しい道具と見るために。これは小さな種をまくよい機会です。というのは、彼女たちに見たがるものを見せた後、彼女たちが何より好きなのは、オルガンの所へ行かせ、弾かせて讃美歌を歌うことです」

同じ雑誌に次の様な記事も掲載されている。

「階上の部屋とはカーテンで仕切られた小さな部屋があった。午後にはいつも婦人と子どもが押し寄せてきた。私はカーテンの後ろで横たわっているしかなかった。彼らがいろいろに話すのを聞くしかなかった。彼らはまるで子どものように聞こえる。最初、彼らは魅力的なベビーオルガンを聞いたがる」

メソジストの1894年の年報に、ノーブル同志が担当している特別に困難な地域であるソウルのアオギ教区に関して、伝道の成功のためにはオルガンが必要である、と語ったノーブル同志の報告が引用されている。

「年の初め、小さなオルガンを使って、静かで、注意深い聴衆を家一杯に満たすことができた。その人数は百人以上に達した。大きな前室で私が礼拝を行っている間、ノーブル婦人は隣の部屋で婦人のために同じような小さな礼拝を行っている。オルガンの使用を続けられないときは、われわれの集会はすぐに元の人数の4分の1以下に減ってしまう。常時出席する探求者は5名で、最後の一人は婦人である。われわれの仕事には韓国人の協力者が必要である。集会が歓迎され、続くための要因として、われわれは小さなオルガンの必要を感じている。戦争がはじまるとわれわれの小さな群はまき散らされてしまった」

オルガンはまだ貴重品で数少ない、おそらく1台が2台のオルガンを運びながらお互いに使用していたようである。オルガンが無いと集会の人数が4分の1に減ってしまう、という記述が目立つ。4分の3の出席者はオルガン目当てであったと考えられる。

「集会が歓迎され、続くための要因として、われわれは小さなオルガンの必要を感じている」というのは宣教の道具としてオルガンを認識を示している初期の記述である。

第8章 讃美歌に関する分業

後で述べるように讃美歌集の編纂にたずさわったのは主として男性宣教師であったのに対して、現地人に日々、讃美歌の歌唱を指導する仕事を担ったのは主として女性宣教師であった。

1. メソジストの讃美歌教育

ソウルのメソジスト宣教団の教育活動の中心は、スクラントン夫人が創設した梨花女学校と、もう一つアッペンゼラーが創設した培材学堂であった。1894年の年報では、「われわれの学校は年々強力になっている。……アッペンゼラーとノーブルが担当している。……英語教育では共通学科として、歴史、物理、化学、政経、声楽そして聖書が教えられている。ノーブル夫人が年間を通して教えている」と培材学堂について総括されている。礼拝での讃美歌歌唱が「声楽」という科目として定着していることが知れる。

培材学堂が一致高等学校（Union High School）に発展したことが、1906年の年報に記載されたバンカー校長（Rev. Dalzell A. Bunker）の報告「一致学校は七十三名の応募によって1905年10月6日に開校した。仕事はPaichai（培材）として知られている建物で始まった」から分かる。

そこでは科目「声楽」が学生に人気があったことについてバンカー校長は、「学生が教会に集まる授業時間が毎日あり、教会讃美歌を歌う練習を受けている。これは彼らが決して疲れることをしらないもう一つの学科である」と述べている。

1908年の報告では、校長は「今年の科目は、歴史、算数、代数、物理、日本語、政経、植物学、簿記、絵画、音楽、その他であった」と述べている。

こうして宣教活動が開始されてから最初の十数年で、女子の梨花学堂、男子の培材学堂（1905年からは一致高等学校）では讃美歌歌唱は「声楽」あるいは「音楽」という科目として定着し、生徒達に人気のある科目となった。

学校の他にも、病院、施療所でも集会が開かれ、讃美歌が歌われた。その歌唱を指導したのは梨花学堂の生徒であった。

2. 長老派の讃美歌教育

アンダーウッド夫人が1889年にミス・ハイデン（Miss Hayden）と一緒に讃美歌を歌って聴かせたという教会の婦人礼拝について、ミス・ドティ（Miss Doty）は1890年2月13日付けの手紙で次のように述べている（Woman's work, 1890 Vol. 5）。

日曜日の午後はいつも韓国人の礼拝があります。アンダーウッドが行ってしまっただけからは、韓国人伝道者が説教をしています。……教会の婦人側はカーテンで仕切られています。彼女らは隔離されています。私が来てからはつねに一杯です。

1893年8月、ソウルの外国人居留地にある日曜学校ではミラー夫人が日曜学校音楽を手伝っていた。

Kro no Mokol の家の 第1ベランダ (first porch) で小さな日曜学校を開いた。

新しく来た子供と比べると、前からの子供が確かに進歩しているのが分かる。

彼らは教理問答の質問にはっきりと答え、Jesus loves me, Happy Land, What can wash away my Sin を歌うことが出来る。・・・彼らの楽しみはもはや歌しかない。今や彼らはとても上手に歌う。

同じ頃、ミス・ストロング (Miss Ellen Strong) は日曜学校の讃美歌について次のように報告している (「婦人の仕事」1894年第9巻)。

英語を話す人たちから離れるため、そして近所の婦人たちと知り合うために、数日間、Koano-mo Kol にあるわれわれの韓国の家にやって来る。・・・わたしは月曜日に来て、土曜日の夕方帰る。学校を長く留守にして滞在する事は出来ないが、当面、こうするつもりである。

新しいセンター。

私はここで日曜学校をはじめた。たいていの子どもたちが私をしっているのです。彼らのために自分の日曜日を諦めた。彼らはやってきて歌うことが好きだから。彼らは私が何をしているか見たがり、何人かは一日に何度もやって来る。今日、そのうちの2人が自分たちだけで "Jesus loves me" を歌った。ほとんど最後まで上手に。彼らは習ったことを理解しているように見える。彼らの人生が変わるのが知りたいが、まだ分からない。

ギフォード夫人がここで祈祷会を持っていて、聖書婦人が定期的に訪問している。...

ソウル伝道地区では最初アレン夫人によって女子教育の端緒が開かれ、ヘロン夫人が最初の女性のための聖書クラスを開設した。ヘロン夫人の事業を受け継いだのだパンカー夫人となったミス・アニー・エラースで、この女学校は、やがて到着した女性宣教師、ヘイドン、ドティ、ギフォードによって発展させられた。

ソウル伝道地区のこのような女子教育の発展は典型的なもので、讃美歌教育の発展は女子教育の発展と軌を同じくしていると考えられる。

「婦人の仕事」(1898年第13巻)には「いろいろなことがある一日」という見出しで、いろんな機会に讃美歌が歌われたことについてのギフォード夫人 (Mrs. D. L. Gifford) のソウルからの便りが載っている。

今日の出来事はいくらか興味を引くであろう。モフェット夫妻が彼らのホームであるピョンヤンに出発することから一日が始まったことを除くと、いつもの通りの一日であったが。彼ら

は先週の木曜日に女学校で結婚し、日曜日一杯われわれと一緒にだった。今朝、ほとんど200マイルの陸路の旅に出発し、・・・・・・

ミッションの数人の婦人たが見送りのためここにやってきて、女生徒たちもやって来て一行を見送りながら "God be with you" を歌った。・・・・・・

午後1時、ギフォード氏はわれわれの信者の一人の父親の葬儀に参加した。・・・・・・

柩は家族の友人が運び、多くの信者が墓まで息子に従い、道々讃美歌を歌った。

「婦人の仕事」（1900年第15巻）には、ソウルの女学校について報告するシャロック夫人（Mrs. A. M. Sharrocks）の書簡が掲載されている。

韓国の少年がお下げ髪で少女のように見えるので、ドティの学校（Doty's school）を訪問するまで、少女たちが家に閉じこめられていることに気づかなかった。その後、9歳から17歳までの少女はみかけないことに気がついた。あんなにもかわいくて、控えめで、優しい彼女たち、およそ全員の中の20人ほどの。彼女たちは宣教師が翻訳した古い讃美歌を美しく歌う。彼女たちはクリスチャンの婦人として役に立つように訓練されている。

「婦人の仕事」（1896年第11巻）にはスクロールやオルガンを使つての讃美歌教育の様子を元山ステーションから伝えるスワレン夫人の書簡が掲載されている。

外国の曲で歌う讃美歌の歌唱を導入して以来、大きな紙のシートに讃美歌が書かれ、家の壁に貼られた。婦人たちがこれを学び、すぐに福音書が読めるようになることを期待している。

多くの集会で歌唱が加わるようになり、韓国人は喜び、ずっと上手に歌っている。私は日曜日の午後、明るい少年たちのクラスを教え、歌ったり、聖書物語を朗読したりしている。

日曜日の午後、ここより北の村から婦人達が礼拝のため私の家にやって来る。ウオンサン（Woensan）の集会ほど出席はよくないが、興味はとても持っている。婦人の一人が読むことを学んだ。婦人達が去った後、外国の子どもたちのための小さな日曜学校を行う。夕方に、われわれの召使いとマー（Mah）夫人が入ってくる。私はオルガンを弾く。われわれは讃美歌を歌い、そして祈る。こうして忙しいがわたしたち全ての喜びである一日が終わる。

クリスマスの1週間まえ、私たちは新しいミッションハウスに引っ越した。急いだったので引っ越しが片づき、信者を家に招待できた。クリスマスの朝、私たち全員早く起き、紙で見事に包んだ韓国人からの小さな贈り物に感動した。10時頃、キリスト教の婦人、彼女たちの友人と子どもがやってきて居間が一杯になった。私は椅子をすべて片づけ、韓国のやり方で座った。同じ時刻にスワレン氏は男性を教会に集めた。私たちは礼拝をはじめ、歌い、祈り、聖書を読んだ。礼拝の後、ケーキとポップコーンボールと日本のお菓子で休憩した。彼らは幸せな気分で家に帰り、後には幸せな家族が残された。

「婦人の仕事」（1897年第12巻）には伝道旅行についてのアンダーウッド夫人の興味

深い記事が掲載されている。

この前の11月にソウルから175マイル離れた、Chang-yan区のSoraiに向けて出発した。

.....

Soraiにつくと歓迎された。村の教会の執事で、およそ10年前にアンダーウッドが洗礼を受けた3人の一人である村長の客になった。

.....

村はとても貧しい。

.....

日曜日、百人の婦人と百人以上の男性と集会を持った。何人かは10マイルあるいはそれ以上の道のりをやって来た。彼らは日曜日に欠かさずやって来て、彼らの米を持って来る。夜に帰る。少数の婦人が読むことが出来、彼らの聖書についての知識は教会で聞いたり、家族で男性から習うものに限られている。私は毎日聖書クラスを開いた。出席者は25名から30名の婦人であった。これらの乾いた唇に貴重な命の杯を捧げることが許されるのは稀な特権である。彼らはほとんど全員クリスチャンであるが、しかし新しい生活をはじめたほんの子どもであり、(神の)言葉の心から真実のミルクがとても必要である。何人かはまだ洗礼を受けていない。彼らは歌うことをとても楽しんでおり、いくつかの讃美歌にはとても強い好みを示している。"Jesus, I My Cross Have Taken," "Happy Day," "Nothing but the Blood of Jesus." 私は毎朝少年少女の歌唱教室を開いている。

「婦人の仕事」(1898年第13巻)にピョンヤンの教会についてのベアード(Annie Laurie A. Baird)の興味深い記事が掲載されている。

記憶が新鮮なうちに終了したばかりの韓国婦人のためのトレーニングクラスについて話したい。

.....

ベアード氏は毎朝婦人達と礼拝し、ルカを教えている。リー夫人がその後マルコを教えている。私は午後、彼女らに旧約聖書を教え、その傍ら毎日1時間歌唱に費やしている。

ミス・ベストはピョンヤンから Woman's training class について次のように伝えている(「婦人の仕事」1899年第14巻)。

トレーニングクラスの冬学期が終わったばかりです。これは昨年5月に最初に開かれたものを有効に引き継いだものです。11月に教会の読者に送られた手紙で、クラスは12月10日にはじめて10日間開かれるだろうとお知らせした。洗礼を志願している者と、受洗した者と両方の婦人を招待した。ただし、費用は自分自身が派遣する教会がもつものという条項つき

で。昨年の春はピョンヤンの教会の婦人たちが彼女らを歓迎した。しかし負担が多すぎて、年に2回開催することは無理であった。

.....

半径100里にある17の異なった場所から28人の婦人たちが集まってきた。

.....

ほとんど全ての婦人が読むことが出来たので、教えることがずっと楽であった。彼らは、それぞれ1時間かそれ以上の聖書授業を1日3回受け、それぞれ30分の歌唱授業を2回受けた。

同じ雑誌にはピョンヤンの婦人会について次のような記事も紹介されている。記事中にはハント夫人の讚美歌教育についての興味深い記述もある。

われわれの婦人会は開催中である。23名の婦人は全期間出席し、他に9名が家が忙しいので5日間だけ出席した。他に2名ほど昨晚出席した。素晴らしいことではないか。午前9時、フィッシュ博士がChapel exercisesを、10時、スワレン氏が聖書の寓話、11時から12時、スワレン夫人がイエスの生涯、午後2時、ハント夫人が歌唱、2時半から3時半、ミス・ベストがルカ伝、そしてE. Sunsaingが夕方のまとめ。

ウエルズ夫人 (Mrs. J. H. Wells) もまたピョンヤンから4月19日に書いてよこした。

私はまた若い婚約中の娘と結婚した婦人の教室も担当している。彼女たちは週に2回私の家に集まり、数学と地理の勉強をしている。

.....

学校の少女たちの数人が最近中国語を学び始め、彼女たちは歌うことに目立って進歩した。教えたのはフィッシュ博士とその後ハント夫人である。

ハント夫人 (Mrs. Wm. B. Hunt) 自身、ピョンヤンからの伝道旅行について同じ誌上で次のように伝えている。

ハント氏とスワレン氏と私はボートでやって来た。Palakpo村に上陸した。そこから私はby chairで20里をAnakまでやって来た。日曜日は忙しい一日である。スワロン氏は朝早く集会を開く。ハント氏は市内に出かける。12時には野外集会 (an open-air meeting) を開く。好奇心から出てきた人たちは興味がわいて、私たちと一緒にいることを忘れてしまう。福音物語はわれわれの言葉だと耳に心地よいが、韓国語ではより心地よいように思える。

午後、信者の婦人たちが20里離れた町から私に会いにやって来る。私たちは歌い、祈り、そして聖書の授業をする。

「婦人の仕事」（1900年第15巻）には、「『長老派の勢力領域内で最も音楽的なステーション』と自慢」と、デグーステーションで音楽が盛んなことを紹介している。

一人の会員がVassar Glee Clubを指導し、別の一人はピアノの専門家で、別の一人はギターを演奏し、全員が歌う。釜山からアメリカのピアノが届いたら大音楽会が開かれる予定である。雨が上がり次第、人足によって最後の10マイルが運ばれるであろう。一台のピアノが25日間の行進を小アジアに運ばれたことに比べると簡単な仕事である。

同誌上で、デグーの日曜学校で子どもたちが喜んで讃美歌を歌う様子が次のように報告されている。

300万人がいるこの地域の少年たちへの最初の仕事は数週間前に始まった。出席者はすでに3倍にになった。3歳から10歳までの9人の子どもの名前を記録している。先週の日曜日、牧師の前の最初の列には明るい顔をした6人の少年が座った。……

教会のドアで立ち止まり、靴を脱ぎ、韓国のソックスをはき、韓国の靴が並んでいる辺りを見て、小さい靴のそろいを数える。そうして内部で何人の顔が挨拶するか知ることができる。……

牧師が讃美歌を宣言する。"Jesus loves me" または"I am so glad that our Father in Heaven"。私は子どもたちを見る。そして喜びの視線をとらえる。というのはこれらの讃美歌がわれわれの日曜学校讃美歌の2つであるからである。

学校の日課の前によく小さな使者たちがドアをノックする。今のところ、教会の隣のSidebotham氏の書斎で会う。シデボッサム夫人がペピーオルガンを弾き、彼女の夫と私が交互に歌唱を指導し、少年たちが旋律の軌道を外れないように世話をする。しかし、しばしば、軌道は埋もれてしまう。1マイルに一人しかいないと想像してみてくれ。一人の少年は"Jesus loves me"の最後の3つの音符しか知らない。それでわれわれは加勢しなければならない。

ピョンヤンの教会で大勢が讃美歌を歌唱する様子については同誌上の記事は次のように伝えている。

ピョンヤン市の新しい教会の建物の礎石が6月25日に定められた。一日の仕事が終わったばかりの夕方、教会の人々は丘の上に集まり、建築の開始を目撃した。……

とても印象深い光景であった。ほぼ千人の韓国の男女が讃美の歌声を挙げ、市内中に響き渡った。……

5週間前、要請がなされた。洗礼志願の婦人は（日曜日の）次の朝、1時間聖書の勉強に集まるように。80人の婦人が応募した。それ以来出席者の平均は57人である。クラスで最も幸福でもっとも真面目な婦人はほとんど目が見えない。しかし彼女は婦人たちに読んでもらった十戒やいくつかの讃美歌や聖書の多くの章を覚えた。

また、次のような記事も掲載されている。

ミッションの年会が開かれているとき、9月にピョンヤンの新しい教会で最初の礼拝が行われた。アンダーウッド博士とゲイル牧師が韓国語で、1200人の座っている男女に向かって説教を行った。扉も窓も人ばかりで一杯であった。最初の讃美歌が歌われはじめると、何人かの目には涙が浮かんた。

第9章 韓国人の讃美歌受容に関する宣教師の評価

讃美歌に関して、どういう人々がどのように受け入れたのか、どのように歌ったのか、これらについて宣教師の評価を判断するための記述を次にひろい出してみると、。歌唱評価については、「手に歌う、最後まで上手に歌う、美しく歌う、進歩した」、と言った表現が目立ち、受容態度については、「子どもたちや婦人たちが讃美歌をととても好んだ、特定の讃美歌に強い嗜好を示している」、と言った表現が目につく。

以下に歌唱評価と受容態度についての宣教師の観察が分かる記述を抜き出してみる。

「Kro no Mokol の家の一階のベランダ で小さな日曜学校を開いた。

新しく来た子供と比べると、前からの子供が確かに進歩しているのが分かる。

彼らは教理問答の質問にはっきりと答え、Jesus loves me, Happy Land, What can I wash away my Sin を歌うことが出来る。・・・彼らの楽しみはもはや歌しかない。今や彼らはとても上手に歌う」（Miss Ellen Strong の日曜学校報告、1893年）

「ミス・ハイデン（Miss Hayden）と私はしばしば明るくて、気を引く（bright, striking）讃美歌を数曲歌うと彼女らはとても喜ぶ」（アンダーウッド夫人の1889年9月3日付書簡）

「彼女（韓国の婦人）たちが何より好きなのは、オルガンの所へ行かせ、弾かせて讃美歌を歌うことです」（「婦人の仕事」1893年第8巻）

「私たちは彼女（日曜礼拝に集まった婦人）たちを喜ばすために"There is a Happy Land" と "Nothing but the Blood of Jesus" を歌う。彼女たちは夢中になってわたしたちの歌を聴く」（「婦人の仕事」1894年第9巻）

「（日曜学校にやってきた子どもたちの）何人かは一日に何度もやって来た。今日、そのうちの2人が自分たちだけで"Jesus loves me" を歌った。ほとんど最後まで上手に」（「婦人の仕事」1894年第9巻、ミス・ストロングのソウルからの報告）

「多くの集会で歌唱が加わるようになり、韓国人は喜び、ずっと上手に歌っている」（「婦人の仕事」1896年第11巻、元山よりスワレン夫人の手紙、2月10日）

「彼女（聖書クラスの集まる25名から30名の婦人）らは歌うことをとても楽しんでおり、いくつかの讃美歌にはとても強い好みを示している。"Jesus, I My Cross Have Taken," "Happy Day"," Nothing but the Blood of Jesus."」（「婦人の仕事」1897年第12巻、アンダーウッド夫人の手紙）

「学校の少女たちの数人が最近中国語を学び始め、彼女たちは歌うことに目立って進歩した」
（「婦人の仕事」 1899年第14巻、ウエルズ夫人（Mrs. J. H. Wells）のピョンヤンからの
4月19日付書簡）

「牧師が讃美歌を宣言する。"Jesus loves me" または "I am so glad that our Father in Heaven"。私は子どもたちを見る。そして喜びの視線をとらえる。というのはこれらの讃美歌がわれわれの日曜学校讃美歌の2つであるからである。

学校の日課の前によく小さな使者たちがドアをノックする。今のところ、教会の隣の Sidebotham 氏の書斎で会う。シデボッサム夫人がベビーオルガンを弾き、彼女の夫と私が交互に歌唱を指導し、少年たちが旋律の軌道を外れないように世話をする。しかし、しばしば、軌道は埋もれてしまう。1マイルに一人しかいないと想像してみてくれ。一人の少年は "Jesus loves me" の最後の3つの音符しか知らない。それでわれわれは加勢しなければならない」
（「婦人の仕事」 1899年第14巻、ブラウン牧師のテグーからの一月付書簡）

「彼女（ドティの学校の少女）たちは宣教師が翻訳した古い讃美歌を美しく歌う。彼女たちはクリスチャンの婦人として役に立つように訓練されている」（「婦人の仕事」 1900年第15巻、シャロックス婦人 "Mrs. A. M. Sharrocks" の書簡）

「一致学校は七十三名の応募によって1905年10月6日に開校した。仕事は培材として知られている建物で始まった。・・・学生が教会に集まる授業時間が毎日あり、教会讃美歌を歌う練習を受けている。これは彼らが決して疲れることを知らないもう一つの学科である」（1906年の年報でのソウルの一致高等学校長バンカーの報告）

第10章 韓国での讃美歌集の出版活動

宣教をはじめて最初の約15年間くらいまでに出版された讃美歌集はすべて、メソジストと長老派によるもので、この2つの教派が順次、出版している。

最初の15年間で讃美歌集は急速に普及し、例えばメソジスト派では1905年までに9冊の讃美歌集を出版し、最初は27曲であったものが9冊目では183曲に拡大されていることは讃美歌普及の急速を示す一つの指標と見られる。

長老派とメソジスト派の讃美歌集編纂努力はそれぞれ影響を与えながら、最終的には、教派合同で1908年に出版された一致賛美歌集「讃頌歌」に結集される。

1. 讃美歌集出版以前の韓国の讃美歌について

讃美歌集が出版される以前には韓国には讃美歌が無かったのかというと、実は、資料としては確認できないが、F. S. Millerの "Early Korean Hymnology" によると、出版される以前は手書きの讃美歌集を使っていたと言う。韓国の讃美歌の特徴はもう一つ、英語ではスクロールと宣教師は書いているが、おそらく日本の掛け軸に似た大きな巻物のようなものにある。それに大きく歌詞を手書きしたものを教会の前に吊して、みんなで見ながら讃美歌を歌っていたと言われている。

手書き時代の讃美歌の特徴は、中国の讃美歌の音をそのまま韓国の文字で転写したもので、翻訳というより、音そのものを転写したものを歌っていたというように記録されている。だから韓国の専門化ですらその音で元の中国の文字を推測するのが非常に難しかったというような記録があるので、讃美歌の中国語の音をそのままハングルの文字に置き直していたのであろう。

つまり、古い最初の讃美歌の多くは翻訳というより中国の讃美歌集を韓国文字で音訳したものであった。したがって完全に中国語讃美歌から派生したもので、韓国の専門家でさえもとの漢字を思い当てるのが難しかったのである。

2. メソジスト派讃美歌集編纂について

讃美歌集序文によってメソジスト派の讃美歌集編纂の事情について述べる。

1895年出版の「讃美歌 (Chang Mi Ka)」の序文は、1892年に韓国ではじめて出版された讃美歌集で、現在、所在が確認されていない「讃美歌 (Chang Mi Ka)」について、

「Chan-Mi-Ka は韓国の教会のために出版された讃美歌の最初の本である。27の讃美歌の翻訳からなる小冊子である。ミーター構造と慣用語句に欠点があった。メソジスト監督ミッションによって1892年に出版された」

と述べている。

この韓国最初の讃美歌集については、長老派のアンダーウッドが1894年に出版した讃美歌集の序文に次のような記述がある。

序文の日付は、1893年9月である。

「最初の讃美歌集の需要をまかなったのは、Rev. Heber Jones が2年前に出版したものであった。それは当時使われていたほとんど全ての讃美歌を納めたもので、およそ30ばかりであったが、歌詞のみの本であった」

さて、「讃美歌 (Chang Mi Ka)」の序文にもとると、

「ミーター構造と慣用語句に欠点があった」最初の「不完全な」讃美歌集をジョンズ (George A. Jones) とロスワイラー (Louise C. Rothweiler) の編集委員が改訂増補したものを1895年に出版する費用は、"ニューヨークのthe Girl's Korean Mission Band of Asbury Church Rochester" が出した。

出版は、1895年1月に開催されたメソジスト派ミッションの年会で正式に許可された。

内容については、序文は、「この新しい版の目的は聖書の主な主題を網羅し、またクリスマスやイースターのような教会の行事を網羅する精選したものをそろえることであった」と述べている。

また、81曲という少数の讃美歌しか収録しなかったのは、韓国人の歌唱力を考慮したものであったことについて、

「他にもたくさんの讃美歌があったが、この版を出したのはわれわれの必要を満たし、上手に歌唱できるように考慮したので、数は限られている。180の讃美歌を不十分に学ぶより、80の讃美歌をよく学んだ方が教会にとってはずっと良いことであろう」

と説明している。

長老派の讃美歌集から引用したものと、ジョンズとロスワイラーの編集委員の翻訳を除けば、この版での讃美歌の翻訳に貢献したのは、ノーブル夫人 (39,49,77番)、ジョンズ夫人 (43)、韓国婦人 (53) であった。また、「この他に、翻訳者がわれわれには分からない讃美歌がいくつかある。またいくつかの讃美歌はこれまでとはまったく新しく翻訳した」と言う。

メソジスト派で1897年に「讃美歌」の第2版と第3版を続けて出版した。その事情について、第3版の序文は、

「『讃美歌』の第1版と第2版とは売れ尽くしてしまい、讃美歌集をただちに供給して欲しいという差し迫った要求がある。したがってこの第3版は第2版を再版して出版した」

と述べている。

第1版 (1895年) と第2版 (1897年) が売り切れるほど、韓国では急速に讃美歌集の需要が高まったことが知れる。

長老派の讃美歌集から引用したものと、ジョンズとロスワイラーの編集委員の翻訳を除くと1897年の「讃美歌」で讃美歌の翻訳に貢献したのは、ノーブル夫人 (30,49,64,77番)、ジョンズ夫人 (43番)、スクラントン博士 (90番)、ミス・レーヴィス (85番)、培材大学の学生 (87番)、梨花学堂の少女 (89番) であった。

「讃美歌」は1900年に出版された第5版で大幅に増補された。その理由について序文は、

「『讃美歌』の第4版は89番含んでいた。この版では176番まで増補された。讃美歌集を十分に増補して欲しいという要求が広くあったので、ここにある増補がなされた」

と述べている。

序文で、「180の讃美歌を不十分に学ぶより、80の讃美歌をよく学んだ方が教会にとってはずっと良いこと」であるから、韓国人が「上手に歌唱できるように考慮したので」、収録数を80に限った、と述べていた初版（1895年）から5年後の第5版では、「十分に増補して欲しいという要求」によって収録数を倍に増やしたことが注目される。

内容については、「教会の公認の礼拝で使用された信頼できる古い讃美歌がまず収録された。次に、教会の集会にふさわしい軽い調子の讃美歌を収録した。子どもの讃美歌は一つのグループにまとめられ、最後にその他の讃美歌を収めた。この讃美歌集には洗礼の儀式書と聖体拝領 Lord's Supperを収めた」と述べている。

讃美歌集需要の急速な高まりについて1902年の年報は、

「われわれはクロス製本の長老派讃美歌集、Chan Song Si 一万部のほとんどをすでに配布した。またメソジスト讃美歌集、Chan Mi Ka (No. 4) 七千部をほとんど刷り上げた。さらに印刷に回すことが出来ればすぐに別の版 (No. 2) を出版することになっている」

と報告している。

長老派の讃美歌集から引用したものと、編集委員の翻訳を除いて、「讃美歌（1900年）」に貢献した人物について、序文は、

「讃美歌について助力してくれた友人達にも感謝する。とりわけRev. C. T. Collyerの関心と助力には感謝している。印刷が出来上がっている時、ミス・ロスワイラーが合衆国のfurloにいて留守であったので、彼女の貴重な助力をあてにできなかった。しかし、帰国するまで彼女が行った、この新しい版に対する貢献はこの版に具体化されている」

と述べている。

3. 長老派讃美歌集編纂について

そもそも讃美歌集は日本でも韓国でも詩、文学、音楽に非常に大きな影響を与えたにも関わらず、例えば韓国長老派の最初の讃美歌集の編纂出版活動を見てみると、現地語による讃美歌の翻訳という難しい事業であったにも関わらず、それを特別の準備もなく、非組織的、あるいは個人の趣味のレベルで行われた活動であるという側面があるので、そこに注目してこの教派の讃美歌編纂活動をたどってみる。

すでに述べたように韓国で一番最初に出版された讃美歌集は1892年のメソジストが出版したものであるが、これは出版されたという記録のみが残っていて、現在、韓国では見つかっていない。だから、記録だけで確認できるもので、現物が無い。

現在韓国で現物が入手できる一番古い讃美歌集が1894年に長老派のアンダーウッド宣教

師が出版した讃美歌集「チャン・ヨン・ガ (Hymn of the Prize)」であるが、これが現在韓国で発見されている一番古い讃美歌集である。

もう一つ注目されるのはこの讃美歌集が最初から楽譜がついている讃美歌集であるということがある。

長老派の讃美歌集の編纂・出版にとって興味深い出来事は1886年、韓国で宣教がはじまって2年くらい経ったとき、ミス・エラースという女性宣教師が韓国にやって来ることから始まった。彼女は、最初のステーションであるソウルで活動をはじめ、それからすぐにバンカーという男性を結婚します。このバンカーという人物は、宣教師ではなくて、日本で言うところのお雇い外国人教師、韓国政府に雇われて、元韓国帝国大学 (royal Korean college) に雇われていた教師です。ミス・エラースが結婚したこのバンカーという人はたまたま音楽を得意としていた人であった。それで、1894年に長老派の最初の讃美歌集が出版されたとき、音楽編集を担当したのはこのバンカーであった。

この点でも、ミッションの中にあらかじめ音楽編集を担当する人材が配属されているわけでもなんでもなく、たまたまやってきた女医が結婚した相手が音楽が得意だったという経緯で、長老派最初の讃美歌集の楽譜に関しては全部バンカーに頼るという、そういった出来事が起こったのである。

最初から組織的に計画された活動ではなかった讃美歌集編纂の必要はいわば宣教の進展にともなって自然と生じたと言える。つまりミッションによって学校や教会ができ、そこで礼拝が行われるようになれば自ずから讃美歌集が必要となってくる。

アンダーウッドが讃美歌集編纂に着手するまでのそういった過程を見てみると次のようになる。

ソウルで宣教が開始された1885年にすぐに学校をはじめの取り組みがはじまった。翌、1886年5月11日に一人の生徒で孤児院をはじめ、やがて10人ほどの孤児を収容するようになる。6月頃にミス・エラース (宣教師) が来韓。

1887年5月21日のアレン書簡によると、1週間前に教会の集会がはじまった。女学校のための建物を取得。エラースはミッションに留まって、女学校で働くことを希望。7月5日、エラース、バンカーと結婚。

9月30日のアンダーウッド書簡によると、この前の水曜日の夜、最初の教会が14名の会員でソウルで組織された。11月、アンダーウッドが留守の間、バンカー夫人が一日一時間孤児院で働く。

女子教育への取り組みの開始については、1888年3月19日のバンカー夫人 (ミス・エラース) 書簡によると、彼女はが少女たちのために働き、先週は毎日教えたという。

12月23日付けのアンダーウッド書簡が伝えるところによると、「我々の教会は一杯で空いた席はほとんどない。50人の韓国人全員が出席し、彼らは全員歌唱に参加している」のであった。アンダーウッドは、すべての若者に、集会の導き方、話し方、読み方、祈り方、歌い方を指導した。こうしてアンダーウッドの心中には、讃美歌集を編集する動機が芽生えたこと

と思われる。

4. アンダーウッドの讃美歌集編纂

長老派で讃美歌の翻訳を最初にはじめたのはアンダーウッドで、ずいぶん早い時期から行っている。

1889年9月3日付けの書簡で彼は、
「アンダーウッドは20から30の、われわれの最も大衆的な讃美歌による小さな讃美歌集を出版している。辞書で忙しいにも関わらず、その内の半分は、この夏に彼が翻訳したものである」

と自分の活動を述べている。

アンダーウッドが讃美歌集編纂活動について最初に報告したのは、1891年2月に開かれたミッションの年会であった。

この報告は非常に興味深く、われわれが知りたいと考えている、讃美歌集が実際どういうふうに具体的に編集されて出版されていたのかという過程に関して、非常に人間くさい部分が現れているので、少し長い引用をおこなう。

「この一年間、他の仕事の合間を見つけて事情が許す限り新しい讃美歌を翻訳した。以前翻訳されたものについてもすべて注意深く修正した」

という書き出しで報告が開始される。

ここで、「注意深く修正した」ということが、実は後でミッション内部で極めて大きな問題に発展してゆくことにあらかじめ留意しておきたい。報告にもどると、

「多くの時間と努力を費やしておよそ30の讃美歌を用意した。その大部分は人気のある家庭讃美歌から翻訳した」

すでに述べた箇所であるが、重要な箇所なので重複をいとわず論じておく。どういう種類の音楽が韓国にもたらされたかという点で注目を引く箇所であるが、非常にオーソドックスな、あるいはドイツのコラールに繋がるようなオーソドックスな曲ではなくて、大部分は人気のある家庭讃美歌、元の英語で言うと、More popular home sacred songs と言っている。したがって家庭のなかで、非常に何か、当時アメリカの日曜学校とか家庭で歌われていた、現在の、簡単に言いうとポピュラーソングに近いような歌から翻訳したというようにアンダーウッドは言ってる。

次に、「残りは韓国人の作詞である、つまりいくつか韓国人が作詞した讃美歌も入れた。しかし、これにはリズムとメーターについて注意深い修正が必要であった」と言う。

ここで詳しく論じることは出来ないが、異文化が接触するとき、讃美歌にとって一番大きな要因はリズムとかメーターを原地の言葉に合わすということで、非常に大きな問題が起こってくることにある。韓国でもリズムとメーターの問題が表面に出てくる。日本の場合で言うと、明治の中頃から詩人たちがそれまでにない詩形、86調とか77調とかを使うようになったが、それは讃美歌の影響で、詩人達は詩形の問題でとても悩んだということが言われている

が、同じことがおそらく韓国でも起こってくるのが、アンダーウッドの報告から予見できる。

次に編纂作業の中身については、アンダーウッドの報告は次のように述べている。

「多大の注意を払ったのはより分かりやすい用語を使うことであった。この用語をミッションの著作のルールにすることは、ミッションのこれからの仕事である」と言う。

先ほど指摘した「修正した」と言うことと、「分かりやすい用語を使った」という2点が後で触れるようにミッション内部で大きな問題となってゆく。

次に実際の作業の内容については、「翻訳のために韓国人助手とその他の仕事をするための助手を一度に5人まで頼んだ」、つまり韓国人の助手は翻訳の助手とその他の仕事をする人間を含めて、5人で仕事をしたと具体的に述べている。

日本の場合は、一応宣教師の編集になっているが、日本人が翻訳について非常に大きな努力をした。日本の最初の楽譜付の讃美歌の場合だと、沢山保羅という人と、酒井貞躬という人が助力たことが分かっている。沢山は長州支藩、吉敷の武士の出身で、酒井は伊勢の武士の出身であった。したがって教養の高い人たちが手助けをしたのである。

韓国の場合は翻訳のため二人の助手がついていた、と書いてあるが、具体的にどういう人物なのか今のところ特定出来ていない。

それから2人か、時にはそれ以上の清書をする人が必要であった、と述べている。

それから次が重要であるが、費用については、「紙、インク、賃金などの大部分は私費で賄った」と言っている。

次も重要な点だと思われるが、本来、ミッションの仕事であるから、きちんとミッションから指名された編集委員がミッションの資金を使って仕事をするのでなければ、ミッションの仕事にはならない。ところがアンダーウッドは自分のお金で、賃金、印刷代をすべて払った、と報告している。「この仕事のためミッションは月4ドルしか回してくれなかった」と言っている。「来年も私費を充てることは出来る。したがって来年は翻訳のために委員会はわずかに50ドルの費用を要求するばいい」と言っている

このようにアンダーウッドがある意味では独走してしまった、つまり、私費を使ってが自由にやってしまった仕事と取られかねない行動をしたために、後編纂作業がほぼ完成した1893年の時点で、このことが韓国のソウルのミッション内部で対立を生むことになったのである。

この対立は他ではなかなか表に出てこない、讃美歌編纂作業の実態を明らかにしてくれるものなので、少し詳しく見て行きたい。

対立を起こした最大の要因は歌詞の問題である。ゴッド（神）をどう翻訳すのかについては、当時の韓国のミッション内部ではまだ意見が一致していなかった。

神の訳語というのは中国でも問題になり、日本でも問題になった経緯がある。日本ではその場合、それによって対立して負けた方がミッションから去ってゆくというような事件も起きている。

同じことが韓国でもあったようで、ゴッドという言葉は、最初はハングルでハナニムという言葉を使っていた。しかし、アンダーウッドによると、異教徒の神を現す言葉にも使われる「ハナニム」という言葉は「良心に反してこれを使うことが出来ない」のであった。

用語についてのアンダーウッドの考えは次のようなものであった。

「中国と同様、用語問題が韓国にも存在する。ゴッドに使われる最も普通の言葉はハナニムであるが、これは文字通りには立派な天国（Honorable Heaven）を意味する。

最初に来たときはこの言葉を使用した。しかし帰国する前にその使用をあきらめた。良心に反してこれを使うことが出来ない。

問題はもちろん新しい讃美歌集ではどうするかである。・・・私は議論のある用語は使わないようにした。Lord, Father in Heaven などに関しては全員が使う事の出来る用語のみを使うように限定した」

こうした考えからアンダーウッドは、

「用語について意見の一致がなくても、一冊の讃美歌集を作る方策を見つけた」
のであった。

それが、

「古い讃美歌から問題のある用語を削除した」
という措置であった。

この措置によってミッション内部に厳しい対立が生じたのである。

対立について、アンダーウッドは次のように説明する。

「私は何も秘密にせず、改訂した讃美歌のありのままの原稿を渡したにもかかわらず、私には一言の話もなく、私が最初に知ったことは、編集委員会に讃美歌集を提出するよう命ぜられたことであった。決定は注意深く表現されているが、ミッションの讃美歌集として採用するかどうか編集委員会に諮られることが命じられた。

ゲラ刷りを要求され、決定することは難しい、と言われたときには驚いた。

それにも関わらず私は不正確な最初のゲラ刷りを送った。

これらすべてのことは私には一言の説明もなかったし、ミッション全体で話し合われたのかも知らない。2、3人のメンバーから私がミッションに不一致を持ち込んだと言われた。私は一人のメンバーから、問題は私が彼らが神についての用意した用語を使わなかったことだと知った。

その用語は異教の神を意味するので私は削除した。」

アンダーウッドにしてみれば、突然巻き込まれたトラブルに対して、まず、「私は昼も夜も仕事をし、他のメンバーが休暇を楽しんでいるときも働いた」と訴える。

次に、ミッションの要求に反論するために、出版費用を持ち出して、次のように説明する。

「出版の費用が無いと知ったので、私はすべて私自身で賄う決心をした。そしてミッションの教会が受け入れるかどうかを聞いてからミッションに寄付することにした」

そしてアンダーウッドは、もしもミッションが彼の讃美歌集をミッションの讃美歌集として認めず、出版することが出来なくなれば、彼自身、次のような苦境に立たされると訴える。

「讃美歌集はすでに印刷者と契約しており、出版するか、そうでなければ重いペナルティが課せられる。ほぼすべて製版されている。メソジストとは出来るだけ早く出版するよう約束している」

さらに讃美歌集が出版できなくなれば、メソジストも予定していた讃美歌集が手に入らなくなり、長老派もこれから1年半の間、讃美歌集なしで過ごさなければならない。

そして、宣教本部も次のような不利益をこうむることになる、とアンダーウッドは指摘する。

別の新しい讃美歌集のために「宣教本部は出版費用を要求されることになるだろう。韓国ミッションはいくらなんでも私に出版費用を負担するように頼めないからだ」

私費で出版費用を負担した、せっかくの努力にケチを付けられたかっこうのアンダーウッドは、落胆した気持ちを「もちろん新しい讃美歌集について出来るだけのことはする、しかし今は以前のようにこの仕事に熱心に取り組めない」と本部に訴えたのである。

アンダーウッドが讃美歌集を出版しようとした時に、韓国ミッションはそれにストップをかけた。そうしてミッションの正式な編集委員会にゲラ刷りを提供させた。提供されたものを検討した上でそれがミッションで公認の讃美歌集として使えるかどうか検討するから、一部提供してくれ、とというのがミッションの立場であった。

本部に対してアンダーウッドが行った訴えに反論する役目を負ったのがベアード夫人であった。1892年の出版委員会報告では、彼女の讃美歌への取り組みについて、「ベアード(W. M. Baird)夫人とミス・ドティが韓国の讃美歌のために(翻訳の)仕事をしている」

11月21日、ベアード夫人は本部に次のように説明した。

「アンダーウッドのアピールに返答するためにミッションによって指名された特別委員会の手紙を送ります。

アンダーウッドは他のメンバーとは独立した立場を望んでいるが、彼の行動は我々には理解できない。彼は最初の宣教師だし、他の宣教師がこの地にくるためにたくさんのことを行ったので、通常のミッションルールに例外を作りたいと思うのは自然であろう。しかし、彼の影響でここに来た人たちもまた信念を持った人間である。彼らはアンダーウッドの件でルールを作った。それが必要だったからである。しかし、なぜ例外を作らなければならないのかは理解に苦しむ。

もしも全員にとって魅力のある仕事があるとすれば、それは著作活動であろう。アンダーウッドだけがこういった仕事出来る唯一の人材であった時代があった。今やミッションはその著作活動を何が何でも一人の人間に任さなければいけないような状況ではない。

ミッションがとった行動の原因はアンダーウッドが讃美歌集を私的に出版したことにある。多くの讃美歌が彼によって書かれたが、他の人の讃美歌といっしょにそれらはミッションの共有物になった。

彼の気前のよさは評価できるし、本は待望されていた。しかしミッション会議で、ゲラ刷りによってすべての選ばれ讃美歌に歓迎できない変更が見つかった。他の人が書いた讃美歌にもまさに同じような変更がされていた。ミッションによってそうする権限を与えられていない

かなる人もそのような改変をしたことはない。

われわれが最初から使ってきた神という用語が、集められたすべての讃美歌集から削除されていた。春にわれわれは韓国での用語の問題をとて残念思った。これまでは用語使用についてはまとまっていた。その用語が集められた讃美歌から削除されていたのである。

本を使用することに不安があったので、ミッションはこれらさまざまな変更に関して、それを吟味し認める機会を持つまで、われわれの教会で使用する許可を少なくとも延期するに値する重要な問題だと認めた。

どのような本の出版も妨げないし、神の用語を誰が使用しても邪魔はしない。ただ、仕事が発行され使用される前に、それがミッションで受け入れられるかどうか言う機会はあるべきである。」

この問題について、本部は、アレン宛てに次のように照会した。

「1月11日付けの手紙を受け取った。讃美歌集に関するアンダーウッドの2通の手紙も受け取った。私が理解している限りでは、ミッションの行動にはいささかの共感もない。しかし奇妙なことにこれに関してミッションから何の連絡もない。それでもう一方の側に何を言うべきかわからない。彼らが何か言ってくるのを待っている」

ベアード夫人の手紙は、何らかの事情で本部に届くのが遅れたのか、それとも韓国ミッションの正式文書と受けとられなかったのであろうか。

本部は12月22日にはモフェットにも照会している。

「ミッションから何も言ってこないで、問題の件に関してわれわれは何もしていない。どの手紙もまったく触れていないのは不思議だ。実際、数週間の間われわれはほとんど手紙を受け取っていない。神を呼ぶ用語の件についてミッションの立場から知らせてくれ」

本部が問題について決定したのは翌年になってからで、1月3日付けのアンダーウッド宛書簡で次のように伝えた。

「讃美歌集に関してあなたが被った不快について深く同情している。あなたの手紙とあなたの抗議に対するミッションの返事をすべて読んだ」

アンダーウッドに利があるとした本部の採決に気をよくしたアンダーウッドは2月9日付けで次のように返事を書いた。

「上記の日付のあなたの手紙から讃美歌集についてたくさんの個人的感情があることが分かった。最初自分は不快に思ったが、今はすべて終わった。悪感情はほとんどないし、誰も見せない。すべては終わった」

こうしたかなり人間臭い経緯の後、アンダーウッドが編纂して1894年に出版された「讃揚歌 第1版」は楽譜が付いた初めての讃美歌集であった。これに関して序文は次のように言う。

「この版にある讃美歌には・・・音楽が付けられた。アクセントが重要な言葉のうえにくるようにし、必要な場合は音楽を少し修正した」

また、音楽については、宣教女医ミス・エラースを結婚し、後にメソジスト派宣教師となるバンカーが音楽編纂を担当したことにに関して次のように言う。

「特別の感謝を Rev. D. A. Bunker に捧げる。元韓国帝国大学 (royal Korean college) にいた彼は編曲が必要なときには編曲をし、とても親切に楽譜を校正し、他の点でもいろいろ助けてくれた」

アンダーウッドは、自分には「悪感情はほとんどないし」、それを「誰も見せない」と言ったが、この後、長老派の活動はソウルを中心とした南長老派とピョンヤンを中心とした北長老派とに分かれて宣教活動を展開した。

もともと同じ教派であるのに、南長老派と北長老派とは、それぞれ別々に讃美歌集を編纂し、出版した。

ソウルではアンダーウッドが引き続き讃美歌集を編纂し、1900年まで第4版を出版した。

これに対して、北長老派では、リー宣教師 (Graham Lee) とギフォード宣教師 (Gifford) による編纂委員会によって、まず、1895年に「讃聖詩 (第1版)」を出版し、この版は1906年の11版まで版を重ねた。

こうして、同じ長老派であるのに2系列の讃美歌集が短い期間に平行して出版されている。これは、おそらく最初の讃美歌集の出版をめぐるトラブルが後々まで尾を引いた結果であったと推測される。

5. 一致讃美歌集について

南長老派と北長老派の間でも、また長老派とメソジストの間でも、お互いの宣教師が翻訳した讃美歌を使って讃美歌集を編纂した。

こうして相互に協力しながら独自の讃美歌集を出版していた南長老派と、北長老派、そしてメソジストは1908年に一致讃美歌集を出版した。

この一致讃美歌集出版へ向けての努力について、メソジストの讃美歌集を編纂してきたジョーンズ宣教師の書簡から引用する。

1908年6月6日

韓国の様々なミッションの協定によって一致讃美歌集が編集されていて、韓国のすべてのミッションによって正式に採用されることになっている。これは極めて当を得たことです。われわれのは・・・低いコストで優れた讃美歌集を得ることができる。・・・われわれが負担する出版費用は800ドルです。われわれはボードに資金を出してくれることをお願いしたい。日曜学校協会が半分持ってくれる可能性がある。これは筋の通ったことです。この讃美歌集は韓国の日曜学校で使用される唯一のものになるからです。この時期にこそ日曜学校協会がわれわれ韓国の仕事を助成することは賢明なことです。

.....

800ドルは韓国的一致讃美歌集を出版する際にメソジスト監督教会が割り当て分を払うのに使います。その代わりに、・・・売り上げはそのままわれわれの讃美歌集基金としてボードに保留し、必要なときに讃美歌集を再版するのに使う。

私は一ヶ月ここに滞在し、ボードに興味を持たせるために出来ることはすべてするつもりです。

1908年6月23日

韓国の新しい讃美歌集に関して委員会が求めてきた情報に関しては、一つの質問については正確なデータを持っていないが、他のものについては次のように説明できます。

(1) これは韓国の全てのミッション総会の公認のもとに出版されるものです。

(2) これは韓国の全福音教会で使用され、教会の発展において日本の一致讃美歌集と同じ大きな計画を満たすものとなる。

(3) 第1版は楽譜がないものは6万部、楽譜付のものは5千部出版される。

(4) われわれも元に何部くるかはっきり言えないが、私の印象では、楽譜なしののものは5分の2、つまり2万4千部、楽譜付のものは2千部だと思う。

(5) この版の出版費用でわれわれの分担は800ドルである。これによってわれわれの信者に売ることができる讃美歌集を受け取ることになり・・・

讃美歌集の販売でわれわれのところに帰ってくるお金は将来必要となる版の出版に使われる。もしわれわれの教会が受け取る部数が5分2で間違いなければ、4万部を下らない部数が教会用に必要なので、十分な部数とは言えない。以上から、これが大きな申し込みであり、自分たちで獲得できるまでこのことを行うには特別の資金が必要だということがお分かりでしょう。

(6) ・・・・讃美歌集の資金が特別助成としてボードから来ることを望む・・・わたしは800ドル全額が送られてくることを要請する。・・・

質問に対する返事がいただけ、助成が得られるものと信じています。

出版の分担費用の捻出に苦慮していたジョンズは、1908年7月1日に本部へ次のようなお礼の電報を打った。

「特別の寄付による讃美歌集の費用、よい考えで、心より賛成します。」

第11章 残された課題

以上述べてきたように、本研究はメソジストと長老派の韓国ミッションによる讃美歌の翻訳と編纂、讃美歌集出版、讃美歌の教育と普及に関する活動についてはじめて具体的に記述したものである。

この研究に直接続く研究としては、1910年以降、日本による植民地教育が開始された後、ミッションの讃美歌教育と日本唱歌教育とがどのような関係にあったのか、についての研究が考えられる。

さらに、先行した日本伝道の経験を参考にしたであろうこともあって、日本と韓国とでは讃美歌の普及はほぼ同じような過程をたどったと考えられるのに対して、時期的にもだいぶ早く、おそらく日本や韓国とはずいぶん違った形で讃美歌が普及したであろう中国の様子についての研究が残されている。

これらの研究の後には、東アジアをさらに環太平洋地域に拡大し、アジア・太平洋近代音楽史という新しい研究領域の確立が視野に入ってくるであろう。